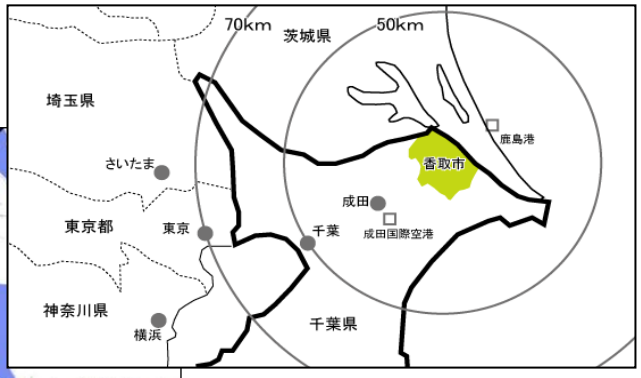
第１章　香取市の歴史的風致形成の背景

１．自然的環境

（１）位置

香取市は、千葉県北東部に位置しており、東京都心から直線距離で約 70 ㎞、成田国際空港から約 20 ㎞の距離にある。市域は東西約 21.2 ㎞、南北約 22.7 ㎞にわたり、面積は、262.35 ㎢と県内第４位の規模を有し、東は東庄町、南は旭市・匝瑳市・多古町、西は神崎町・成田市、そして北は茨城県の稲敷市・潮来市・神栖市に接している。北部には利根川が西から東へ貫流しており、河口から約 40 ㎞に位置する。平成 18 年に佐原市、小見川町、山田町及び栗源町の 1 市 3 町が合併し、現在に至っている。



香取市位置図

香取市の概要図

（２）地形

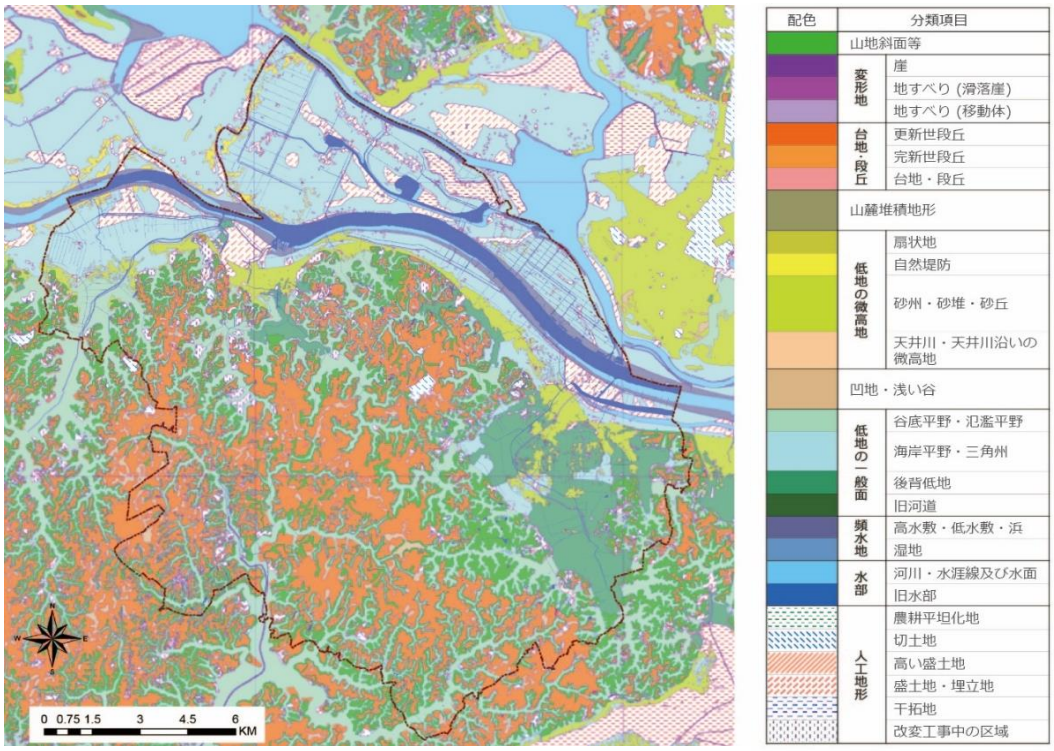
香取市が位置する千葉県北東部の地形は、下総台地と呼ばれる台地と利根川沿いの沖積平野に二分される。台地は標高 30～50ｍで、東から西にかけて低くなる傾向がある。市内の最高標高は小見川地区東部の台地上で 52ｍである。千葉県の最高標高は愛宕山（南房総市）の 408ｍで、最高標高が全国で最も低い県であり、香取市は全国的に見ても極めて起伏の小さい地域である。台地と低地の高低差は大きくないものの、その間の斜面は急斜面となっているところが多く、地すべりが発生することもある。台地には樹枝状の谷が刻まれ、奥部の細い谷は谷津と呼ばれる。

香取市の数値標高図

（３）地質

香取市周辺は、約 12 万年前の温暖な間氷期は現在よりも海水面が高かったため、関東平野南部の多くの地域と共に海底下にあった。この時期に下総台地の土台となる成田層と呼ばれる海成層が形成された。その後、約 2 万年前までの寒冷な氷期においては海水面が 100m 以上低下し、陸化した台地上に関東ローム層が形成された。現在河川が流れているところには深い谷が刻まれ、台地を樹枝状に削ったことで現在の台地縁辺の急斜面が形成された。その後、約 6,000 年前の縄文海進の時期にかけて急激に温暖化したことで海水面が上昇し、現在よりも数m高い位置まで海水が流入した。関東平野南部の川沿いは海水で満たされ、香取市北部には広大な内海が形成されたほか、市内南部の栗山川流域も内海になっていた。現在にかけて再び海水面が低下し、河川により運ばれた土砂が堆積することにより沖積平野が広がっていった。中世以前は市内北部地域は、旧鬼怒川（現・利根川）が氾濫するたびに流れが変わる氾濫原であったが、江戸時代以降の干拓事業により主に水田として利用されている。

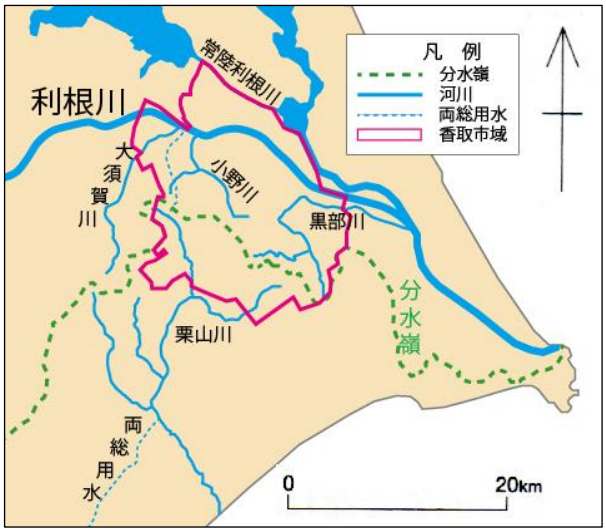
以上のような変遷を経て地形が形成されたため、台地の露頭の模式的な断面は、表土の下に関東ローム層、その下に海成層である成田層という順序となる。



香取市周辺の土地条件図（市域は赤枠）

（４）河川

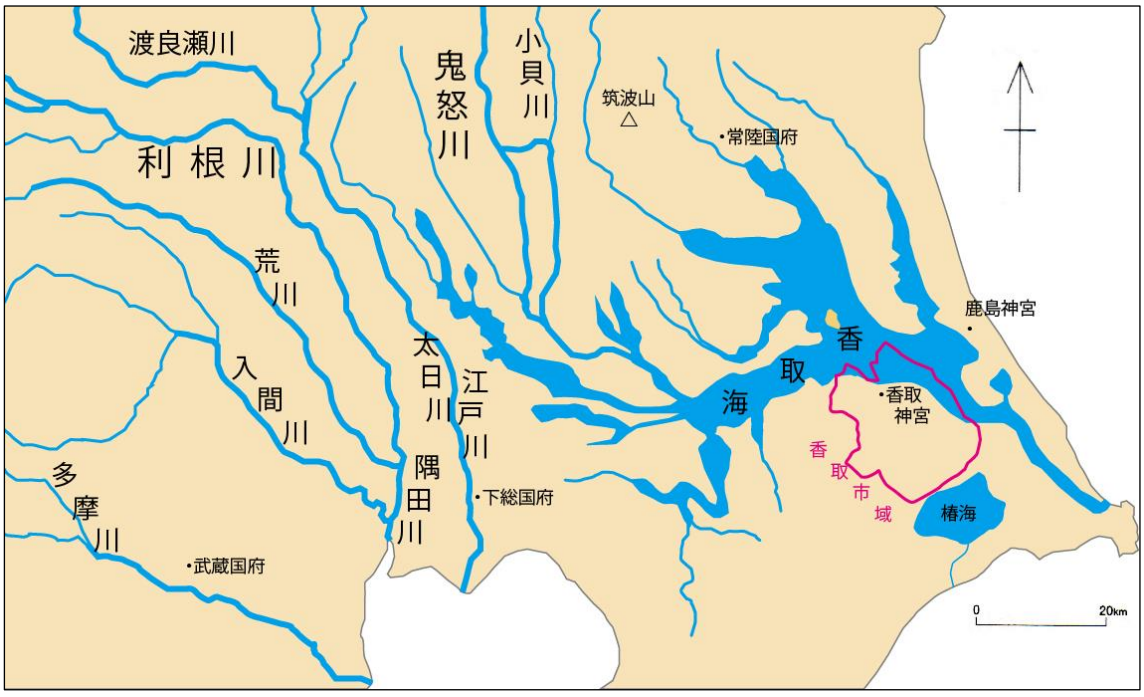
河川は市北部を利根川が西から東へ流れる。市内北限は常陸利根川が茨城県との県境をなしている。また、下総台地から利根川に合流する支流は、大須賀川、小野川、黒部川などがある。市南部は直接太平洋に注ぐ栗山川の上流域であり、栗山川は利根川から取水した水を上総方面に送る両総用水としての役割も果たしている。



香取市周辺の河川の流域

香取市の北部、千葉県と茨城県にまたがる地域は、現在よりも温暖な気候であった約６千年前には大きな内海が存在していた。その範囲は、霞ケ浦や北浦、印旛沼、手賀沼にも及び「香取の海」や「香取流海」などとも表現されていた。古代においては香取・鹿島の両神宮を中心に、この内海沿岸には水上交通を介在した文化・経済圏が醸成された。

なお、利根川は江戸時代前期に徳川幕府による東遷がなされる前は、今の隅田川を経て東京湾に注いでいた。群馬県北部を主な水源とする利根川の水を、現在の江戸川の川筋を流れていた渡良瀬川と共に、香取の海を経由して銚子から

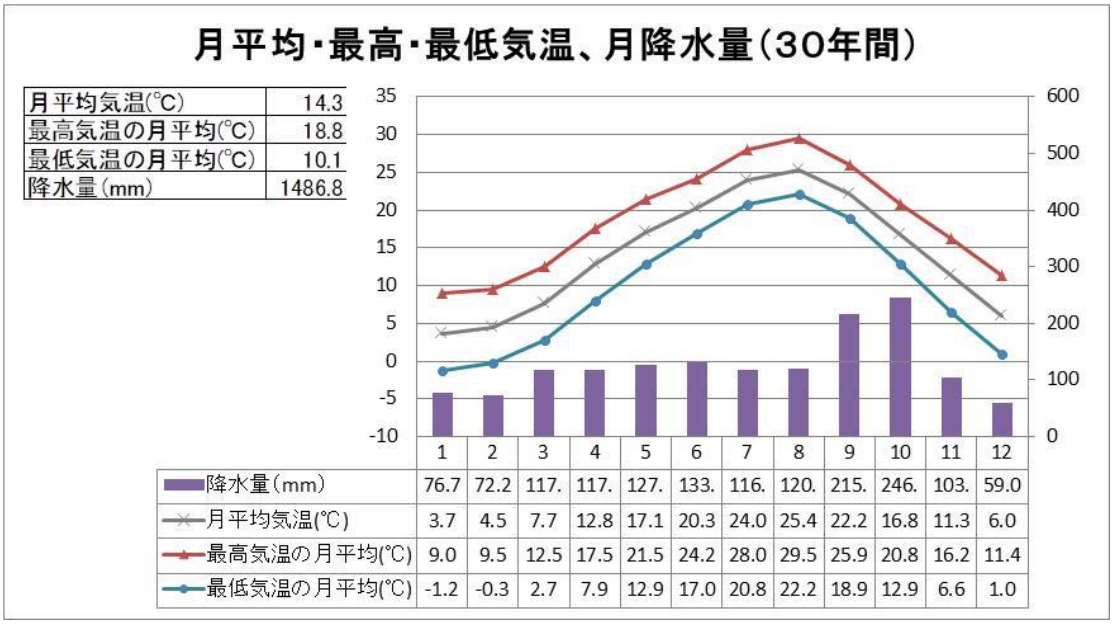


利根川・鬼怒川の約 1,000 年前の水脈想定図

太平洋に注がせることに成功したことで、江戸城下町の水害が軽減した。また、それまでの東廻り航路の難所である銚子沿岸部や館山を経由せず、利根川と江戸川を通る新たな河川航路が開発された。このことにより銚子・佐原などの利根川沿いの町が物資の集積地として発展したが、一方では水量が増加したことで頻繁に水害を受けた。幾多の改修工事を経て現在では水害もほとんど見られなくなったが、昭和初期までは水害の常襲地帯であり、塩害の影響も受けた。

（５）気象

香取市の年間平均気温は、昭和 63 年（1988）から平成 29 年（2017）の 30 年間の平均で 14.3℃である。同期間の最暖月の平均気温は約 25.4℃、最寒月の平均気温は約 3.7℃、年較差は 21.7℃である。年間降水量は同期間の平均で 1,486.8 ㎜、秋季に多く冬季に少ない傾向が見られる。全国的に見ると太平洋側の気候に位置づけられる。なお、千葉県内の銚子は 1980～2010 年の年平均気温が 15.4℃、年間降水量は 1,659.8 ㎜、館山は同期間で年平均気温が 15.9℃、年間降水量が 1,790.0 ㎜である。両地域は海洋性気候の影響が強いが、香取市は比較的気温が低く降水量も少ない。千葉県は関東の中では海洋性気候の影響が強い地域であるが、香取市は県内では内陸寄りの傾向が見てとれる。冬季は北西寄りの季節風が強く、旧家では屋敷林もしくはマキなどの生垣で家を囲んでいるところも多い。降雪はあまり見られず、根雪になることは稀である。



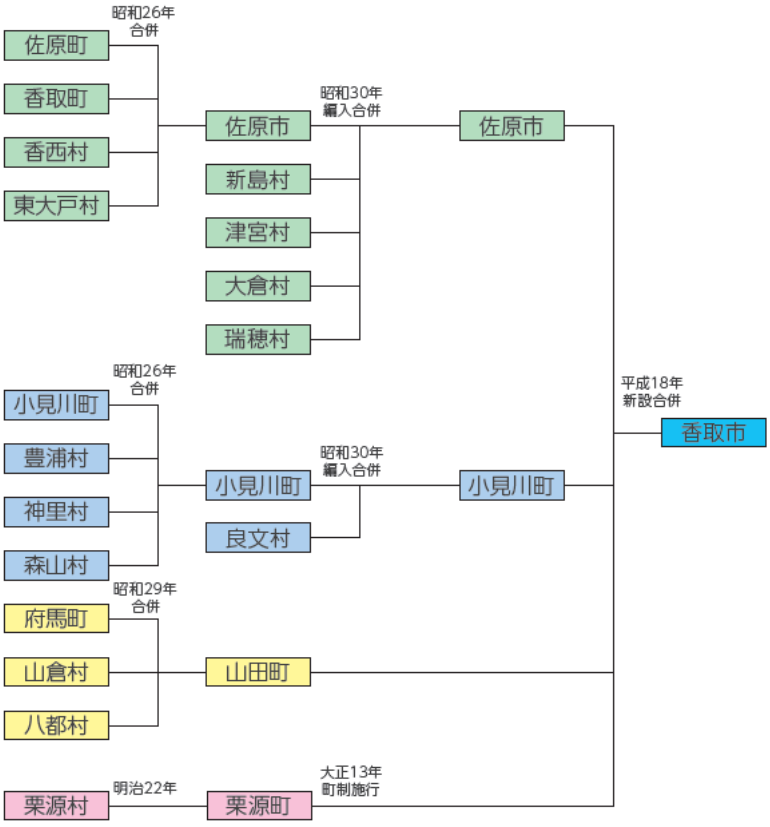
香取市の過去 30 年間の気象記録（気象データは気象庁参照）

２．社会的環境

（１）香取市の成り立ち

香取市は平成 18 年（2006）3 月に佐原市と小見川町、山田町、栗源町の 1 市 3 町が新設合併し、現在に至っている。現在の香取市内においては、明治 22 年（1889）4 月の町村制施行の際、佐原町や小見川町など計 18 の町村が成立した。

旧佐原市においては、昭和 26 年（1951）3 月に佐原町、香取町、香西村、東大戸村（明治 32 年〈1899〉に本新島村の一部を編入）が合併して佐原市が誕生し、昭和 30 年（1955）2 月には、新島村、津宮村、大倉村、瑞穂村を編入合併した。旧小見川町においては、昭和 26 年（1951）4 月に小見川町、豊浦村、神里村、森山村が合併して小見川町が誕生し、昭和 30 年（1955）2 月には、良文村を編入合併した。旧山田町は、昭和 29 年（1954）8 月に府馬町、山倉村、八都村が合併し、山田町が誕生した。旧栗源町は、明治 22 年（1889）4 月に栗源村が誕生し、大正 13 年（1924）4 月に町制施行により栗源町に移行した。

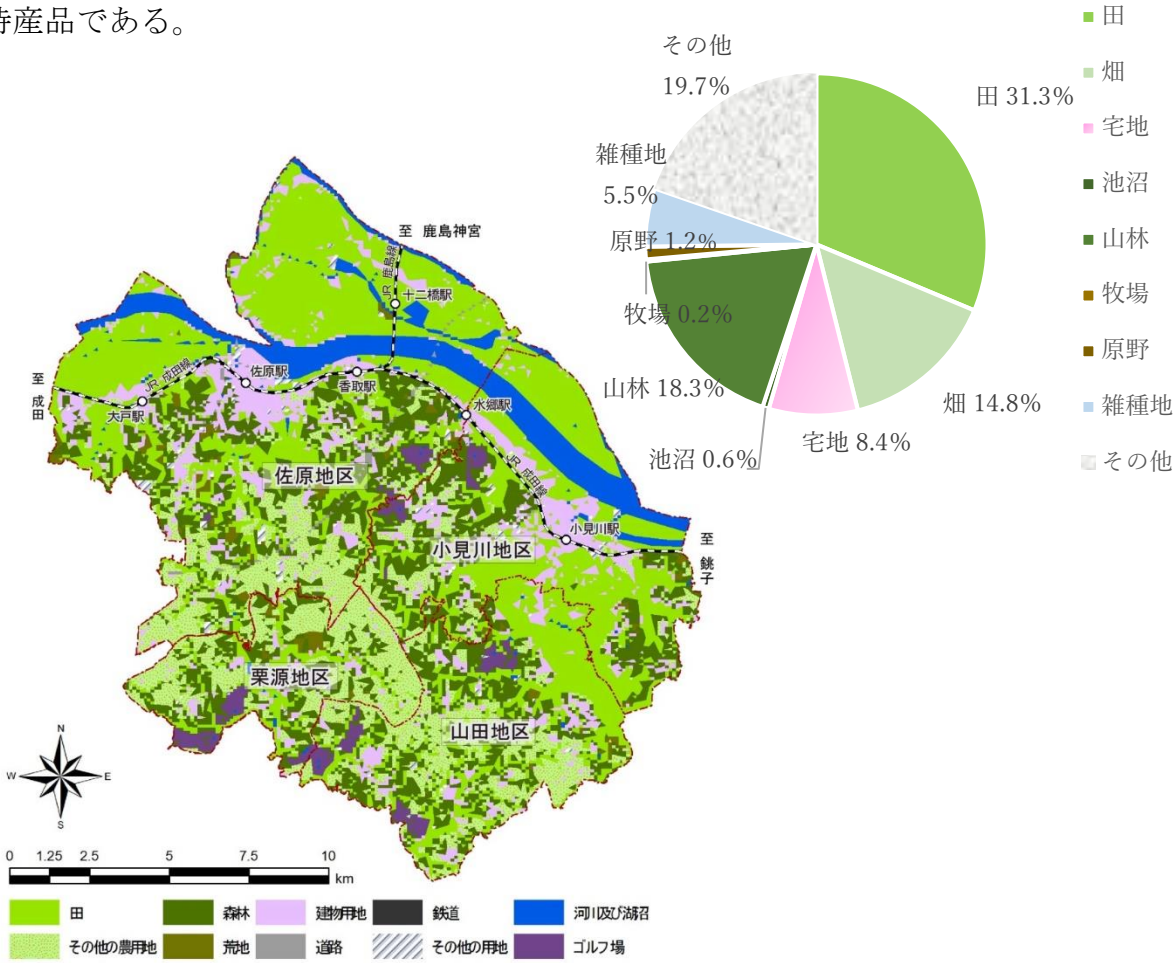


合併経緯図（位置は 5ｐ香取市の概要図を参照）

（２）土地利用

香取市は、豊かな自然環境や歴史的資源等に恵まれ、佐原地区中心部、小見川地区中心部に市街地が形成され、郊外には農村集落等が散在している。特に佐原地区中心部には古い町並みが残り、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、市内観光の中心となっている。

香取市の農産物生産額（農林水産省平成 28 年市町村別農業産出額）は県内 2 位で、全国でも 14 位に位置づけられる農業が盛んな地域でもあり、低地と台地を生かした農業生産を行っている。市内の 31%を占める水田は利根川沿いやその支川、また栗山川沿いなどに分布する。米の生産量は香取市誕生後、県内でも 2 位以下に大きく差をつけて 1 位を維持している。市内の 15%を占める畑地は下総台地上を中心に分布する。野菜類の生産額も常に県内上位で、甘藷などが特産品である。

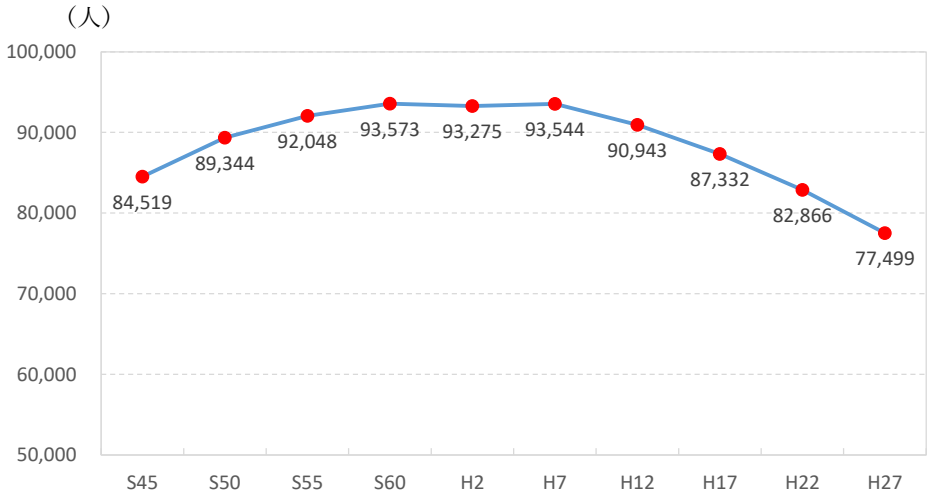


香取市土地利用図と地目別土地面積割合グラフ（市面積：262.3k ㎡）

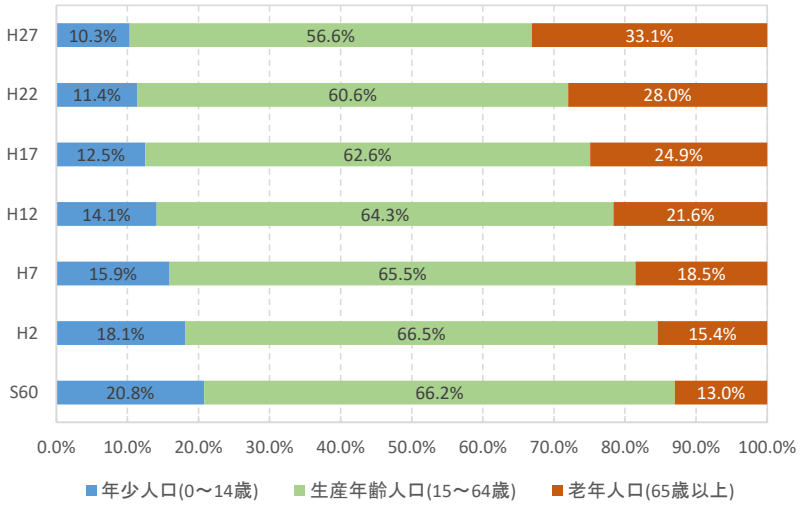
（３）人口動態

香取市の人口（平成18年以前は、合併前の佐原市、小見川町、山田町及び栗源町の人口の合計数）は、昭和45年（1970）以降増加を続けていたが、昭和60年（1985）をピークに減少に転じている。近年はその傾向が加速しており、平成17年（2005）から平成27年（2015）までの10年間では、約１万人（11.3%）減少している。

年齢階層別人口の推移をみると、15歳未満の年少人口の比率が減少する一方で、65歳以上の高齢者人口の比率が大幅に増加している。全体として本市の人口構成は、少子高齢化が加速度的に進んでいる。



人口の推移



年齢階層別人口の推移

（４）交通機関

香取市は、古くは「香取の海」を中心とする水上交通が盛んで、江戸時代からは利根川を中心とした舟運が発達し、様々な物資の集散地として栄えた歴史を有し、古くから交通の要衝の地でもあった。

香取市周辺の道路に関しては、東京・千葉方面と茨城県とを結ぶ交通動脈として、東関東自動車道水戸線があるほか、近接地に首都圏中央連絡自動車道の整備が進められている。市内の道路網としては、利根川とほぼ並行して東西に横断する国道 356 号線（銚子市～我孫子市）と西部を南北に縦断する国道 51 号線（千葉市～水戸市）の国道２路線を中心に、主要地方道、一般県道、市道等によって構成される。

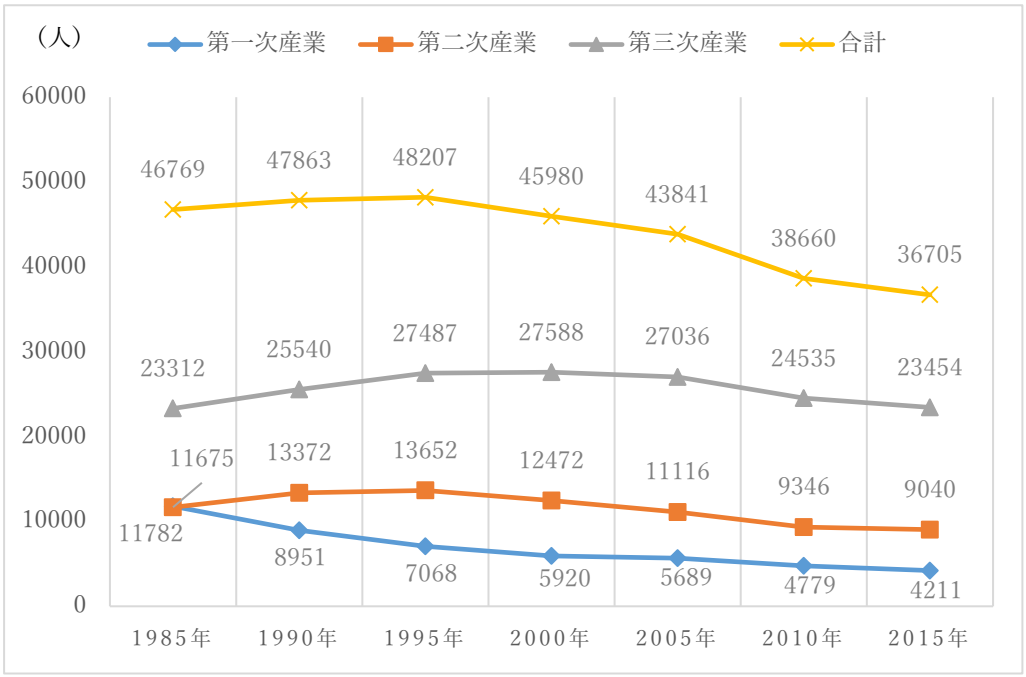
鉄道については、東京・千葉方面と銚子方面を結ぶ JR 成田線と、佐原と茨城県鹿嶋市方面を結ぶ JR 鹿島線が走っており、成田線の大戸駅・佐原駅・香取駅・水郷駅・小見川駅、鹿島線の十二橋駅の合計６つの駅がある。JR 成田線利用で、東京まで約 85 分、成田まで約 30 分となっており、通勤・通学者の日常的な交通手段として欠かせないものとなっている。

市内の交通機関

バス交通については、民間バス会社による路線バスと東京方面とを結ぶ高速路線バスが運行されており、住民や観光客の移動手段として大きな役割を果たしている。路線バスは利用者の減少による維持・確保が課題となっているが、高速路線バスについては、東京まで直通で約 90 分という利便性の高さから、利用者が年々増加している。

（５）産業

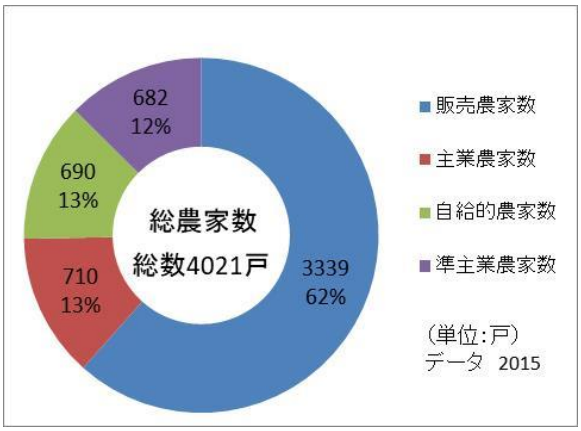
就業者数の推移としては、平成７年(1995）をピークに人口の減少に伴って就業者数も全体として減少している。構成比率の推移をみると、第３次産業就業者の割合が増加傾向にあり、第１次、第２次産業従事者の割合が減少傾向にある。第１次産業就業者数は一貫して減少していながらも、平成 27 年（2015）まで構成比率は 10%を超えており、全国平均の４％よりも高い水準にある。



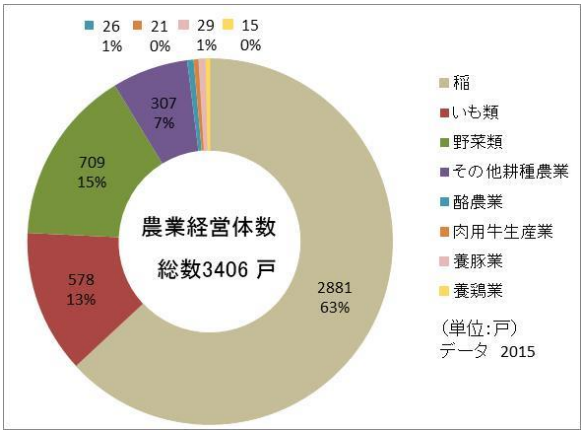
産業別就業者数の推移　　資料：国勢調査

○農業

香取市では、温暖な気候、利根川の豊富な水、下総台地の肥沃な耕地などの自然条件に恵まれ、稲作、畑作、畜産など多様な農業が展開されている。本市の総農家数は 4,021 戸で、うち販売農家数は 3,339 戸、経営耕地面積は 11,300ha(『農業センサス』2015)となっている。



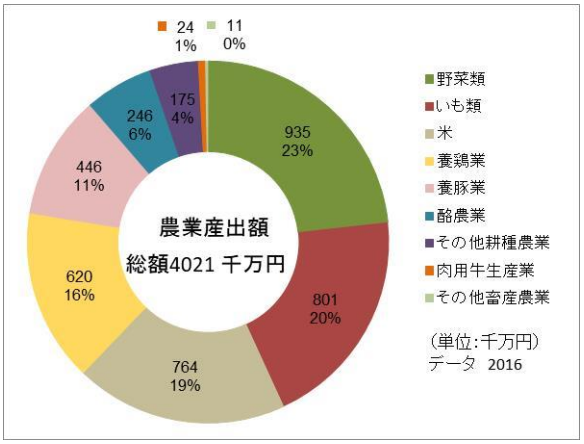
平成 27 年市内総農家数



平成 27 年市内農業経営体数

経営体（複数の個人または世帯が、共同で農業や、事業を受託する）数でみると米が 2,881 経営体と突出しており、次いで野菜が 709 経営体、いも類が 578 経営体(『農業センサス』2015)となっている。

また、農業粗生産額は総額で約 402 億円となっており、部門別でみると野菜が約 94 億円でもっとも多く、次いでいも類が約 80 億円、米が約 76 億円である。畜産関係では、養鶏が約 62 億円、養豚が約 45 億円、酪農が約 25 億円（平成 28 年度値）などとなっている。



平成 28 年市内総農家数

○工業

香取市の工業の状況をみると、事業所数は 105、従業者数は 2,387 人、製造品出荷額等は約 645 億円（平成 26 年工業統計調査）となっている。製造品出荷額等は、平成 23 年（2011）までは減少の傾向を示してきたが、平成 24 年（2012）からは増加の傾向を示している。

	平成 21 年	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年	平成 25 年	平成 26 年
事業所数	133	122	121	119	110	105
従業者数	3,076	2,873	2,476	2,694	2,548	2,387
製造品出荷額等	69,149	59,041	54,231	59,943	62,154	64,557

資料：工業統計調査（単位：事業所、人、百万円）

事業所数、従業者数、製造品出荷額等の推移

○商業

香取市の卸売業、小売業を合わせた商店数は 870 店、従業員者数は 5,021 人、年間販売額は約 1,128 億円（平成 26 年商業統計調査）となっており、年々減少している。

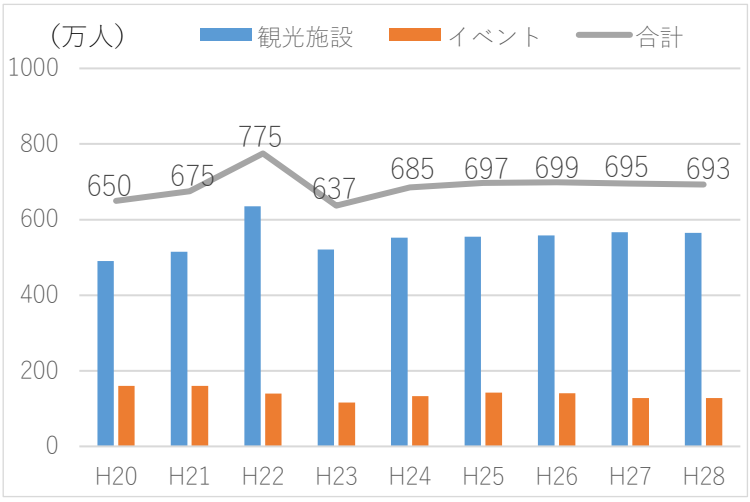
	平成 11 年	平成 14 年	平成 19 年	平成 26 年
商店数	1,571	1,447	1,223	870
従業者数	7,629	7,520	7,018	5,021
年間販売額	161,937	145,720	135,284	112,808

資料：商業統計調査（単位：店、人、百万円）

商店数、従業者数、年間販売額の推移

（６）観光

香取市の年間入込客数は、平成 28 年(2016)には約 693 万人となり、平成23年(2011)の震災時には約637万人と減少したものの、その後は回復している。

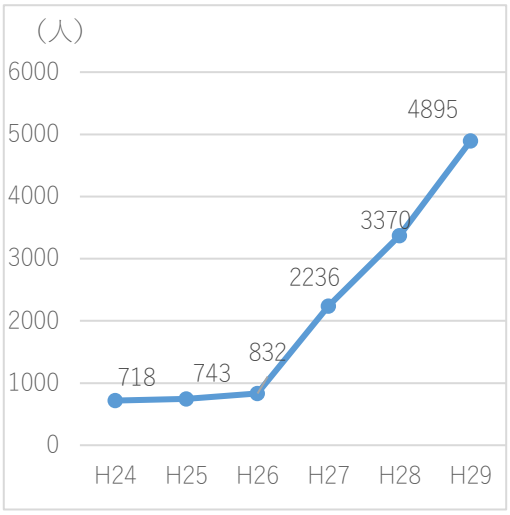


香取市の年間入込客数

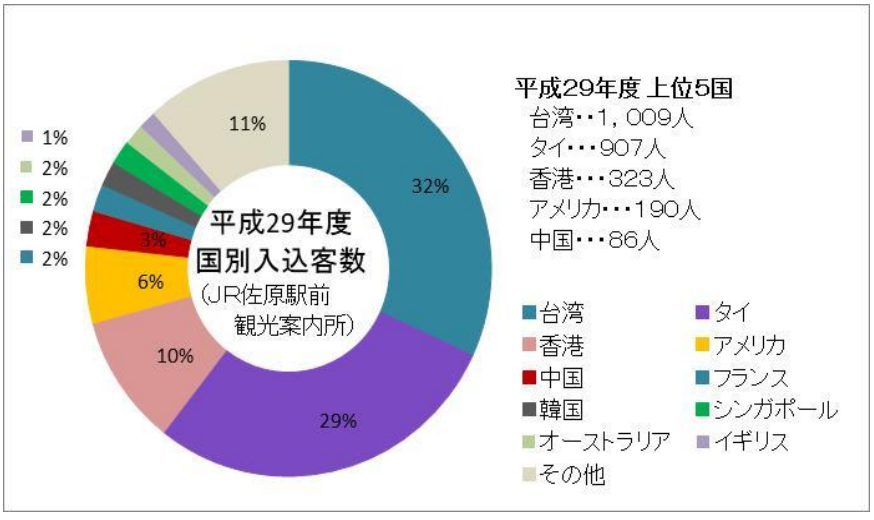
観光の特徴は、主だったもので香取神宮や国選定の重要伝統的建造物群保存地区である小野川沿いの町並み、道の駅さわら等に日常的に観光客が訪れる。ほかにも、道の駅くりもと、農産物直売所（風土村）、観光果樹園、ふるさと農園が開設され、都市住民との交流拠点が整備されつつある。近年では水上スポーツ、釣り、ゴルフなどスポーツ観光に訪れる人も増加している。また、季節行事では夏と秋に開催される「佐原の山車行事」や香取神宮の初詣などに多くの観光客を集めている。ほかにも、城山公園のさくらつつじまつりや水郷佐原あやめ祭り・はす祭り、小見川祇園祭、水郷おみがわ花火大会、ふるさといも祭にも多くの人々が訪れる。

平成 28 年度に、成田・佐倉・銚子との周辺観光圏で「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」として日本遺産に認定され、さらに佐原の山車行事を含む「山・鉾・屋台行事」33 件がユネスコ無形文化遺産に登録されたことにより、香取市の魅力を国内外に発信し、観光客の誘致を図るなど地域振興に繋げている。

外国人観光客については、成田国際空港に近いことなどもあり、観光案内等を行う町並み交流館独自の統計では年々増加傾向にある。同じく悉皆調査ではないが、JR 佐原駅前の観光案内所の来訪者数比率（平成 29 年度）は、国別では、台湾（32%）・タイ（29%）・香港（10%）・アメリカ（6%）の順で多く、台湾とタイで半数以上を占める。タイについては、著名俳優を起用した映画・ドラマのロケ地として何度も使われたことにより認知・注目を集めたためである。また、無料公衆無線 LAN サービス Katori Free Wi-Fi の構築と多言語併記観光案内サインの段階的整備を行い、観光客の滞在・回遊性の向上及び満足度向上を図っている。



町なみ交流館 外国人観光客数推移



佐原駅前観光案内所 外国人観光客来訪者数ならびに比率

３．歴史的環境

（１）原始

香取市で最古の人類の痕跡が確認されるのは阿玉台北遺跡から出土したナイフ形石器であり、約 2 万年前に遡ることができる。以降、縄文時代には気候が温暖化することで海水面が上昇し、関東平野南部の沿岸部と同様に、台地上を中心に多くの貝塚が形成され、大規模貝塚も多く残されている。香取市北部の利根川を望む台地上や利根川の自然堤防上には各時代の遺構が密集して分布しており、特に縄文時代と古墳時代の遺跡が多い傾向がある。出土した遺物から霞ケ浦周辺の遺跡との共通点が多く、かつての「香取の海」とも呼ばれた広大な内海（8p 参照）を中心とした文化圏を形成していたと考えられている。

○先土器時代

香取市で人々の生活が営まれ始めたのは、小見川地区の阿玉台北遺跡から出土したナイフ形石器等から、先土器時代と考えられる。この時代は現在に比べ寒冷な気候で、約2万年前は千葉県北部で年間平均気温が現在より7℃ほど低く、現在の北海道北部の稚内よりも寒冷であったと考えられている。下総台地周辺は海水面の低下により、乾燥した台地と深い谷が広がっていた。石材は特に北関東方面を原産とするものが多く、関東以外からも運び込まれていた。

○縄文時代

縄文時代は、気候が温暖化したため海水面が上昇し、現在の利根川下流域は霞ケ浦を含め、成田市付近まで広く海水が湾入していた。香取の海と呼ばれる広大な内海の沿岸には多くの集落が営まれていた。集落跡や貝塚の調査例により、動植物や魚介類を採集して生活を営んでいたことが明らかになっている。その中でも阿玉台貝塚、良文貝塚、下小野貝塚、城ノ台貝塚は全国的な知名度を誇っている。

阿玉台貝塚標柱

海岸線の変化に対応して形成された貝塚は、小見川地区を流れる利根川支流の黒部川沿いに多く、国指定の史跡である良文貝塚や阿玉台貝塚などがあり、全国有数の大型貝塚密集地となっている。いずれも主にハマグリ・アサリなどの海水産の貝で構成され、縄文時代中期を中心とした貝塚である。特に、阿玉台貝塚は約５千年前の縄文時代中期前半の阿玉台式土器の標式遺跡であり、学史的にも重要な遺跡である。良文貝塚出土の香炉形顔面付土器は昭和 32 年（1957）に県指定有形文化財となっている。ほかにも、香取市中央部に所在する下小野貝塚は、昭和 25 年（1950）の発掘調査の際に出土した土器によって縄文時代中期初頭の下小野式土器の標式遺跡となっている。また、城ノ台貝塚は縄文時代早期の大規模貝塚として知られる。

香炉形顔面付土器

良文貝塚については、その保護団体として昭和 4 年（1929）に「貝塚史蹟保存会」が結成され、地元の人々により保護がなされてきた。現在、阿玉台貝塚を含め「まほろばの里」として活用されており、香炉形顔面付土器等の出土遺物の保存活用・展示も行っている。

○弥生時代

弥生時代は、稲作や金属器が我が国にもたらされ、大きく社会状況が変化した時代である。当時も市内北部には、「香取の海」と呼ばれる内海があり、それを望む台地縁辺ならびに自然堤防上に弥生時代の遺跡が残されている。しかし、規模は小さいため稲作が十分に発達していたとは考え難く、漁労活動と併用していたと考えられている。

標高約 50ｍの黒部川沿いの台地上に立地する小見川地区の阿玉台北遺跡からは、茨城県の南部から千葉県の北部に分布する弥生時代中・後期の土器が出土している。また、当遺跡の北西約 10 ㎞のササノ倉遺跡からも同様の土器が一括して出土している。これらの諸特徴から東京湾岸の影響下ではなく、内海を共有する茨城県南部との文化交流が盛んであったと考えられている。

○古墳時代

三ノ分目大塚山古墳近景

香取市内には、台地上ならびに自然堤防上に多くの古墳・古墳群が残されている。中でも、三ノ分目大塚山古墳（市指定史跡）は、墳丘長 123ｍの規模を誇る県内屈指の大型前方後円墳である。古墳時代中期の５世紀前半から中頃に築造されたと考えられる。この古墳からは、長持形石棺と大型の円筒埴輪が見つかっている。利根川下流域最大規模の大塚山古墳の被葬者は、広大な香取海の水上交通を掌握していた豪族であったと推察されている。

石枕出土状況

市内西部の山之辺手ひろがり３号墳、大戸宮作１号墳からは、被葬者の頭部をのせるために作られた石の枕「石枕」が出土している。石枕は香取の海沿岸地域独特の埋葬形態で、４世紀終わり頃から６世紀前半頃までの比較的短期間に流行した。

大塚山古墳の約 100 年後の６世紀中頃に、城山１号墳が南東に約１㎞離れた台地上に造られ、円筒埴輪、人物・馬・家などの形象埴輪が出土している。また、埋葬施設は横穴式石室で木棺を伴い、石室内からは舶載の三角縁神獣鏡をはじめ、大刀や鉄鏃などの武器や鎧・冑などの武具、装身具、馬具などの多くの副葬品が検出されている（県指定考古資料）。特に三角縁神獣鏡は畿内を中心とした地域に多く出土していることからヤマト政権との深いつながりが推察され、被葬者は当時この地域を支配していた下海上国造に関係する人物と考えられている。

その後、仏教が伝わると全国的に寺院の造営が始まり、７世紀末頃には古墳の造営はされなくなる。それに代わって、香取市内でも寺院が営まれるようになる。当地方で最も古い木内廃寺跡は７世紀後半の建立で、その西方約１㎞にある清水入瓦窯跡から出土している瓦はこの寺院に供給されたものである。このことから寺院建立のための専門技術を持った集団がこの地に定着していたと考えられている。

（２）古代

大化元年（645）の乙巳の変以降、これまでの国造による支配地域は「評」に再編され、その上に「国」、下に「里」が置かれた。その後、大宝元年（701）、養老元年（717）の再編を経て、天平 12 年（740）ごろに「国・郡・郷」となった。この地方行政組織は平安時代まで続くことになり、現在の香取市域は下総国香取郡及び海上郡・匝瑳郡に属していた。

香取市内ではこの時代の遺跡が数多く確認されており、水田耕作に適した広い低地だけでなく、狭い谷部を望む台地上にも集落が営まれるようになった。これは、鉄製農工具の普及などにより、谷奥部まで開墾が可能になったことが大きな要因と考えられるが、香取神宮の存在も見過ごすことはできない。

○香取神宮の創建

ヤマト政権の東国支配の拠点として祀られた社を創始とする説がある香取神宮は、奈良時代の８世紀には既に周辺地域に一定の勢力を持っていたと考えられている。また、香取神宮北部に広がる香取の海は、外海にもつながる軍事的な要衝として見なされていたことから、その掌握のために鹿島神宮と共に置かれたともいわれる。

８世紀後半に中央で権力を占めていた藤原氏が香取・鹿島の両神と枚岡社の二神を勧請し、奈良の春日大社を創建した。こうした背景もあり、当時は伊勢神宮のほかには香取と鹿島の三社のみ「神宮」の名称を冠し、別格の扱いを受けていた。

海獣葡萄鏡

香取神宮には千葉県の工芸品で唯一の国宝である海獣葡萄鏡が収蔵されており、正倉院御物や愛媛県の大山祇神社と合わせ「日本三銘鏡」と称される。中国の唐時代（618～907）初期につくられ、8 世紀に中国よりもたらされた伝来品である。

○香取神宮に関わる遺跡群

香取神宮周辺では、奈良時代に小規模な集落として成立し、平安時代へと継続する遺跡が多い。これは、香取神宮社領の耕地拡大により、これまで開発できていなかった地域の開拓によって再編された集落と考えられ、多田地区の多田日向遺跡・多田寺台遺跡や織幡地区の織幡妙見堂遺跡などが挙げられる。これらの遺跡では、多数の竪穴建物跡のほかに小規模な掘立柱建物跡も発見され、寺や僧侶に関係する墨書土器や仏具も出土していることから、集落内寺院の存在が指摘されている。特に、多田寺台遺跡では神職名と寺を併記した「赤祝連國刀自寺」という墨書土器が出土しており、神仏習合を示す資料として注目されている。

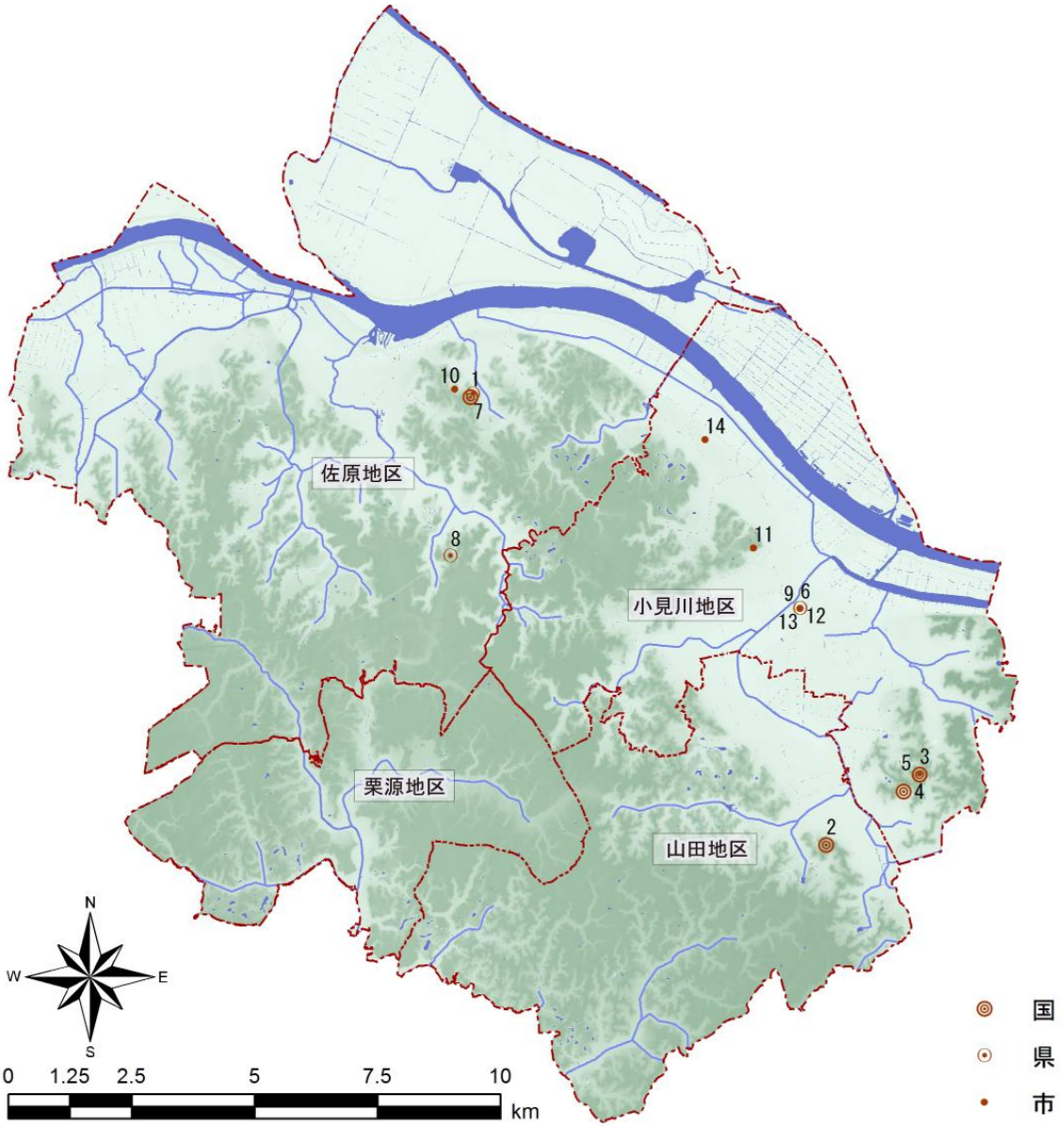
多田日向遺跡空中写真

また、戸籍や人名・地名に関する墨書土器が多いのも特徴である。増田地区の古屋敷遺跡や御座ノ内遺跡では、「山幡」と読める墨書土器が出土している。正倉院文書に「下総国鉏托郡山幡郷　養老五年(721)戸籍」が残されており、この墨書土器の発見により「鉏托郡」は香取郡を指し、これらの遺跡周辺が「山幡郷」であったことが明らかとなっている。

古屋敷遺跡出土の墨書土器「山幡」

○平将門と平良文

律令制が崩壊していくにつれ、地方においては荘園化が進み、特に関東地方では争乱の時代となっていた。そういった状況下で平将門が「新皇」を名乗り、国家建設を計画する、将門の乱（天慶の乱：935～940）が生じた。この乱の平定に尽力した一人である平良文の館跡と伝わる地が阿玉台地区に所在する。このゆかりから「良文村」が明治 22 年（1889）から昭和 30 年（1955）まで存続し、国指定の史跡である良文貝塚の名称の由来にもなった。



No	指定	分類	名称
1	国・国宝	有形・工芸品	海獣葡萄鏡
2	国	記念物・植物	府馬の大クス
3	国	記念物・遺跡	良文貝塚
4	国	記念物・遺跡	阿玉台貝塚
5	県	有形・考古資料	香炉形顔面付土器
6	県	有形・考古資料	城山第1号古墳出土品
7	県	記念物・植物	香取神宮の森
8	県	記念物・遺跡	下小野貝塚
9	県	有形・考古資料	関峯崎３号横穴出土金銅製三尊押出仏
10	市	記念物・遺跡	又見古墳
11	市	記念物・遺跡	城山第4号墳
12	市	有形・考古資料	瓦当笵
13	市	有形・考古資料	大戸宮作1号墳出土品
14	市	記念物・遺跡	三ノ分目大塚山古墳

原始・古代における香取市の文化財分布

（３）中世

中世になると、海運も盛んになり、香取神宮は、香取の海を往来する漁民らから深い信仰を集め、その交易を保護した。荘園を経済基盤としていたこの時代、農業技術が著しく向上し、生産物を売る市場が栄え、次第に商工業も発達した。また、寺院が建立され、仏教が広く民間に浸透し、神仏習合が定着した時期でもあり、仏像や板碑など今に伝わる有形文化財が見られるようになる。

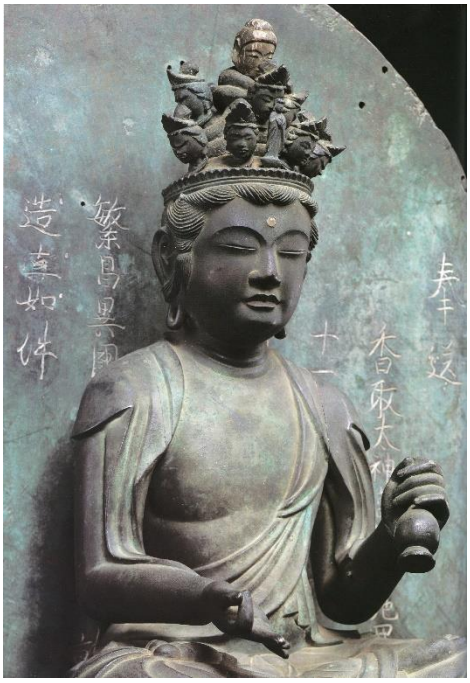
○香取神宮の隆盛

香取神宮には、重要文化財である香取大禰宜家文書をはじめ、中世以降の文書がよく残されており、千葉県内の中世史研究の根幹をなしている。平安時代末には香取神宮の本殿などは伊勢神宮と同じく 20 年ごとに遷宮が行われており、香取神宮神領として周囲に荘園を持ち、100 名以上の神職を抱えていた。伊勢、鹿島、そして香取の三社のみが有した「神宮」の社格にふさわしい規模と勢力を誇っていたが、中世の後半には、厳しい社会情勢の中でそれを維持していくことが難しくなっていったことが、これらの記録から知られている。

○観福寺の建立

佐原地区の牧野にある観福寺は、寺伝によると寛平 2 年（890）尊海僧正の開基と伝わる。本尊は平将門の守護神とされる聖観音菩薩である。千葉氏の祈願所として歴代武将の厚い信仰を受け、中世以降も佐原周辺地の厚い信仰を集めている。

なお、観福寺が所蔵する国指定の重要文化財の懸仏 4 躯（釈迦如来坐像・十一面観音菩薩坐像・地蔵菩薩坐像・薬師如来坐像）は、神仏分離令により香取神宮から放出され、売り出されていたものを個人が観福寺に納めたものである。うち 2 躯には弘安 5 年（1282）の陰刻銘があり、元寇のため異国降伏などを祈願して、香取神宮に納められたものと考えられている。



十一面観音菩薩坐像

○香取市域における千葉氏

源　頼朝が東国に流された際に伊豆での蜂起に失敗し、安房や上総で苦境に陥っていた際に支援したのが千葉介　平　常胤で、鎌倉幕府設立に携わる有力な御家人であった。千葉常胤には武勇に優れた六人の男子がおり、それぞれに領地を与えたことで千葉六党と呼ばれた。そのうち五男胤通と六男胤頼の二氏が香取市域に領地を持っていた。

・国分氏

国分氏は千葉介平常胤の五男胤通にはじまり、戦国期には香取郡内で最も有力な在地領主になっていった。胤通が本矢作城を築き居城とし、国分氏第5代泰胤が、鎌倉時代末期に大崎城に本拠を移したとされている。香取市大崎にある大崎城は、矢作領主の居城のため古くは「矢作城」とも呼ばれていた。城跡は香西川中流域の南北に延びる台地にあり、南北約800m、東西約300mという香取地域では大規模な部類の城郭である。国分氏が香取神宮の領地侵犯をたびたび行っていたことが「香取文書」に残されている。

・東氏

東氏は千葉介平常胤の六男胤頼が東庄周辺に領地を得て在住し、その地の名を取って東氏を名乗ったことにより始まる。幼少期に京で和歌を習っていたため、屈強な千葉六党の中では異色の存在であった。その東氏の居城といわれている森山城跡が、市内東部の岡飯田・下飯田地区にある。城は、黒部川とその支流に挟まれた東西にのびる半島状の台地に築かれ、その規模は南北約430m、東西約620mに及ぶものである。城の構造は、直線連郭式と呼ばれるもので、郭、空堀や馬出などの遺構が良好な状態で残されている。東胤頼夫妻の墓は、同じく岡飯田の芳泰寺に造営され、市指定史跡となっている。

東胤頼夫妻の墓

○下総型板碑建立の流行

板碑は鎌倉時代以降に見られる供養塔婆の一種で、細長い石板状の形状を基本に、地域や時代、石材の差によって様々な形状がある。仏教や民間信仰の普

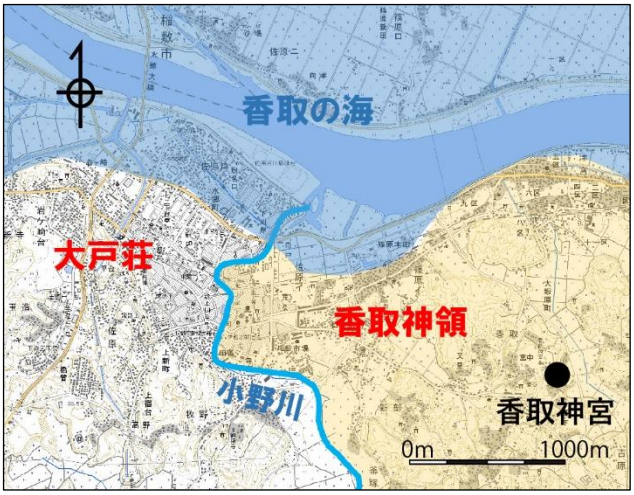
及により、東北地方から九州地方まで広く分布し、その数は全国で 10 万基、関東地方で 5 万基におよぶとされている。下総地方には下総型と呼ばれる板碑が分布し、香取市はその中心的な位置にある。

市内には、県内最古級の板碑が多く所在する。香取市上小堀の長泉院墓地で発見された右写真の板碑は、正元元年（1259）八月廿二日の銘がある。高さ 240 ㎝、幅 58 ㎝で、筑波山などで産出する黒雲母片岩を用いた県内でも有数の大型板碑である。ほかにも同時期である鎌倉時代中期の板碑が確認されており、鎌倉時代後期から室町時代には板碑の造立数が大幅に増加する。そこに刻まれた銘文は、文字資料の少ない中世の貴重な資料である。

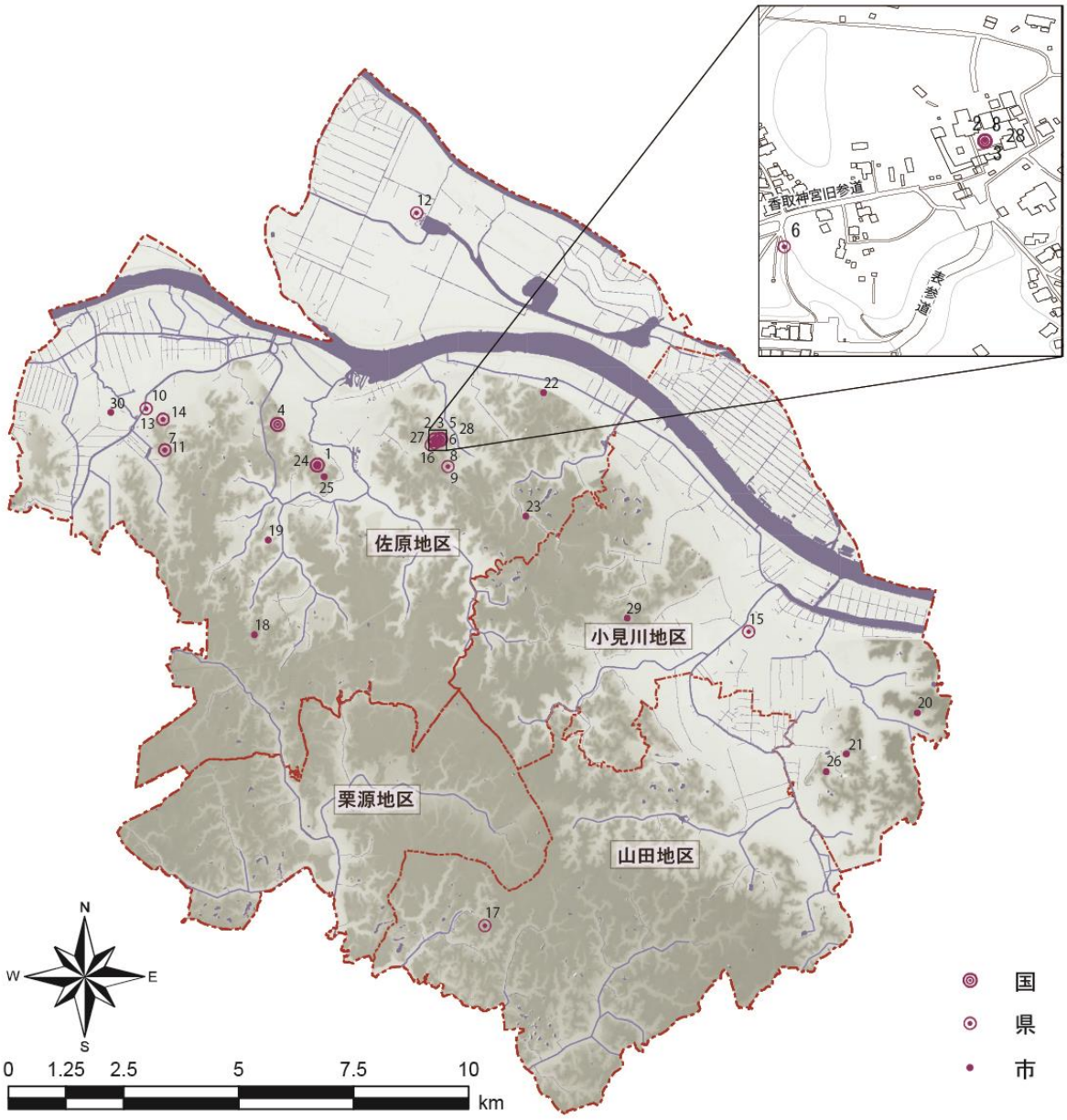
正元元年八月
廿二日銘板碑

○佐原宿の形成

中世以前は、佐原が位置するところは香取の海と小野川に挟まれてできた砂洲や氾濫原で、鎌倉時代初期にはじめて「佐原」の名称が現れる。小野川を境に東側が香取神領、西側が大戸荘であった。砂洲上の微高地を中心に開発が進められ、応安 5 年（1372）の『佐原村南かう屋同沖名検注雑事帳』（録司代家文書）には商業が行われていることが確認でき、嘉慶 2 年（1388）には佐原宿と呼ばれていた。また、南北朝時代の応安年間（1368-1375）には、ともに領主である香取神宮の大祢宜家と千葉氏との間に緊張が高まったことがあった。その際に佐原村の録司代（現在の本宿側：香取神領側に居住）は、香取神宮に対しては千葉氏に不服従の旨を、千葉氏に対しても神宮に不服従の旨を、誓約状の形で申し入れた。両岸の領主に対して、一種の中立を宣言し、この中立状態は戦国時代にまで続いた。住民による主体的な自治運営と商業の歴史は、江戸時代以降にも受け継がれていった。



12 世紀ごろの佐原周辺の状況



No	指定	分類	名称
1	国	有形・工芸品	銅造十一面観音坐像　銅造地蔵菩薩坐像 銅造薬師如来坐像　銅造釈迦如来坐像
2	国	有形・工芸品	古瀬戸黄釉狛犬
3	国	有形・工芸品	双竜鏡
4	国	有形・彫刻	木造十一面観音立像
5	国	有形・古文書	香取大禰宜家文書
6	県	記念物・遺跡	天真正伝香取神道流始祖飯篠長威斎墓
7	県	有形・彫刻	羅龍王面・納曽利面
8	県	有形・工芸品	香取神宮古神宝類
9	県	無形	天真正伝香取神道流の型
10	県	有形・工芸品	梵鐘（貞和五年在銘）
11	県	有形・工芸品	大戸神社和鏡
12	県	有形・考古資料	板碑（正元元年九月三日在銘）
13	県	有形・考古資料	板碑（正元元年九月在銘）
14	県	有形・考古資料	板碑（正元元年十月廿五日在銘）
15	県	有形・考古資料	板碑（正元元年八月廿二日在銘）

16	県	有形・古文書	香取分飯司家文書
17	県	民俗・無形民俗	山倉の鮭祭り
18	市	記念物・遺跡	本矢作城跡
19	市	記念物・遺跡	大崎城跡
20	市	記念物・遺跡	森山城主東胤頼夫妻の墓
21	市	記念物・植物	樹林寺四季桜
22	市	民俗・無形民俗	側高神社のひげなで祭
23	市	記念物・遺跡	源満仲伝承地
24	市	有形・彫刻	木造聖観世音菩薩立像・ 木造愛染明王坐像
25	市	有形・歴史資料	観福寺文書
26	市	有形・歴史資料	千葉親胤御影
27	市	有形・歴史資料	大禰宜家所蔵資料
28	市	有形・歴史資料	香取神宮八龍神像
29	市	有形・考古資料	多宝院万福寺跡双式板碑
30	市	有形・考古資料	正嘉二年在銘板碑

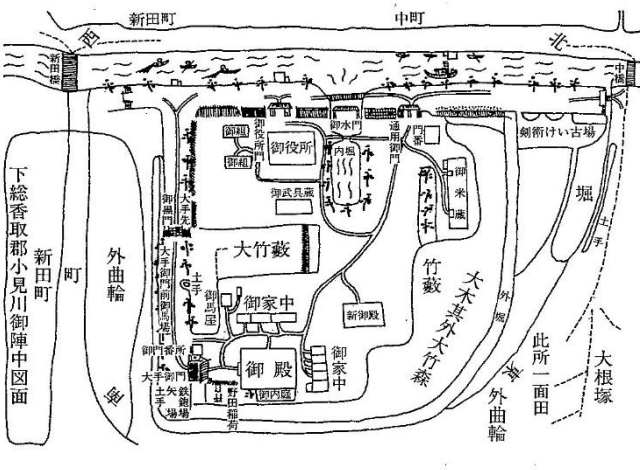
中世における香取市の文化財分布

（4）近世

江戸幕府の成立により、香取市域においても大きく影響を受けた。直接的なものでは小見川藩の成立、佐倉 油 田牧の設置などが挙げられる。間接的には、利根川の東遷により 舟 運の航路が変わったことで佐原や小見川が発展した。政治体制が安定したことで神楽などの祭祀が各集落で発展し、その最たるものとして佐原の大祭が行われるようになった。その一方で、栗源地区や隣接する多古町の日蓮宗寺院は、幕府による不受不施派の弾圧を受けた。

○小見川藩の成立

小田原の役での北条氏の滅亡に際して、重臣であった千葉氏も滅亡し、市内東部・小見川地区においては領主も千葉氏系の粟飯原氏から代官の吉田佐太郎に変わった。その後、土井利勝、佐倉藩領などを経て、慶安 2 年（1649）に内田正信が小見川藩主となった。



小見川藩陣屋絵図（市指定文化財・脇家古文書より）

三代将軍・徳川家光の側近であった正信は、家光が 47 歳の若さで病死した際、側近の大老・堀田正盛らと即日切腹し殉死した。その後、何度かの危機がありながらも小見川藩が廃藩置県を迎えるまで存続したのは、正信が将軍家光の死に臨み、殉死し果てた功績によるところが大きいと言われている。

○利根川の東遷とその功罪

江戸幕府の大規模治水工事により、東京湾に注いでいた利根川の水量の多くを銚子から太平洋に流すことに成功した。江戸の水害が軽減されるとともに、東廻り航路（東北から江戸に米などを送る際の航路で、房総半島から一旦伊豆半島の下田に渡ってから江戸に入った）の難所である銚子・館山を経由しない、新たな河川航路が開発された。これにより銚子・佐原などの利根川沿いの町が舟運による物資の集散地として発展した。その結果、佐原や小見川の中心部に河岸ができ、酒や醤油などの醸造業が興った。江戸との物資の交流だけでなく

文化も流入し、伊能忠敬をはじめとする知識人や文化人を多数輩出した。

その一方で、水量の増加により水郷地帯は水害に悩まされ、利根川沿岸は土砂の堆積が進行した。しかし、これを機に氾濫原において新田開発が進み、「新島」と呼ばれた十六島地域が形成された。この地域は道路の代わりに舟での移動を基本とし、増水時の避難小屋と蔵を兼ねる水塚を設けるなどの工夫もなされている。

現在も使われている水塚

○佐原の繁栄

利根川下流の河岸場で最も繁栄をみせたのが佐原であった。佐原は武士が居住しない純粋な在方町であった。利根川の東遷後、台地から利根川に流れ込む小野川の両岸と、これと交差する香取街道を中心に、遅くとも元禄期(1688～1704)には町並みが形成されていた。

大人形の嚆矢となった旧関戸町の猿田彦（頭部等が市指定文化財）

この時期には、利根川水系の舟運を基盤に、江戸と結びついた商品流通機構が整備されたものとみられる。実際、佐原の有力商人は、香取郡域に広がる多古藩や旗本知行所の年貢米を搬送しており、その権利を荷場と称していた。さらに、村外から入り込んできた商工業者や奉公人を吸収して戸数と人口の増加を続け、天保 9 年(1838)には 1163 軒・5649 人とあり、利根川筋で最大級の町場となっていた。

佐原の山車行事の起源は定かではないが、少なくとも 18 世紀前半にはその原型が見られ、練物を中心とした祭礼を始めるようになった。やがて、文化的・経済的に力を蓄えた各町内が意匠を競いながら行事を行う中で、江戸に優るものとして、巨大な飾り物を乗せた山車が現れ

るようになった。それとともに、江戸祭囃子に各種邦楽の要素と里謡や流行歌まで取り入れ、佐原囃子を作り上げた。

この佐原型の山車と佐原囃子を用いる祭礼は、佐原を中心として、千葉県北東部及び茨城県南部に広く分布している。千葉県内では香取市小見川、東庄町、多古町など、茨城県内では潮来市、鹿嶋市、行方市、稲敷市などに伝播しているなど、周辺地域の祭りに大きな影響を与えており、佐原を中心とする一つの地方的な山車文化圏を形成するに至っている。

○下総佐倉油田牧跡

野馬土手絵図（『下総名勝図絵』宮負定雄 1846）

香取市南西部には、江戸に近接し軍馬の養成に適した平地が多かったことから、幕府直轄の牧が設置されていた。九美上地区にある国指定の史跡「下総佐倉油田牧跡」は、野馬の産出を目的として幕府により開発、整備された公的な牧場の中心部である。油田牧は佐倉七牧の一つで市内九美上付近を中心とした一帯に広がっていた。野馬込跡は、この油田牧内に設けられた構築物の跡で、追い込んだ野馬を捕獲・選別する施設である。

牧の周辺には野馬を囲い込むために土手が築かれ、その高さは３～４メートルほどで、土手に堀が設けられているところもある。現在この地域には畑地が広がっているが、かつて油田牧に含まれた九美上、大根、下小野、岩部、高萩、油田などには部分的に土手が残されていて、その当時の風景を想像することができる。

○栗源地区の日蓮宗信仰

市の南部、旧栗源町から多古町にかけては日蓮宗、特に不受不施派の信仰が厚かったところで、江戸時代には多くの寺院や檀林（僧侶の教育機関）が開かれた。この宗派は幕府からは禁制の宗派として扱われ、特に寛文期（1661-1673）

以降は事実上禁止、弾圧されるようになったため、密かに活動を続けた時期が長く続いた。千葉県内では上総国武射郡や夷隅郡などでも根強い信仰があった。

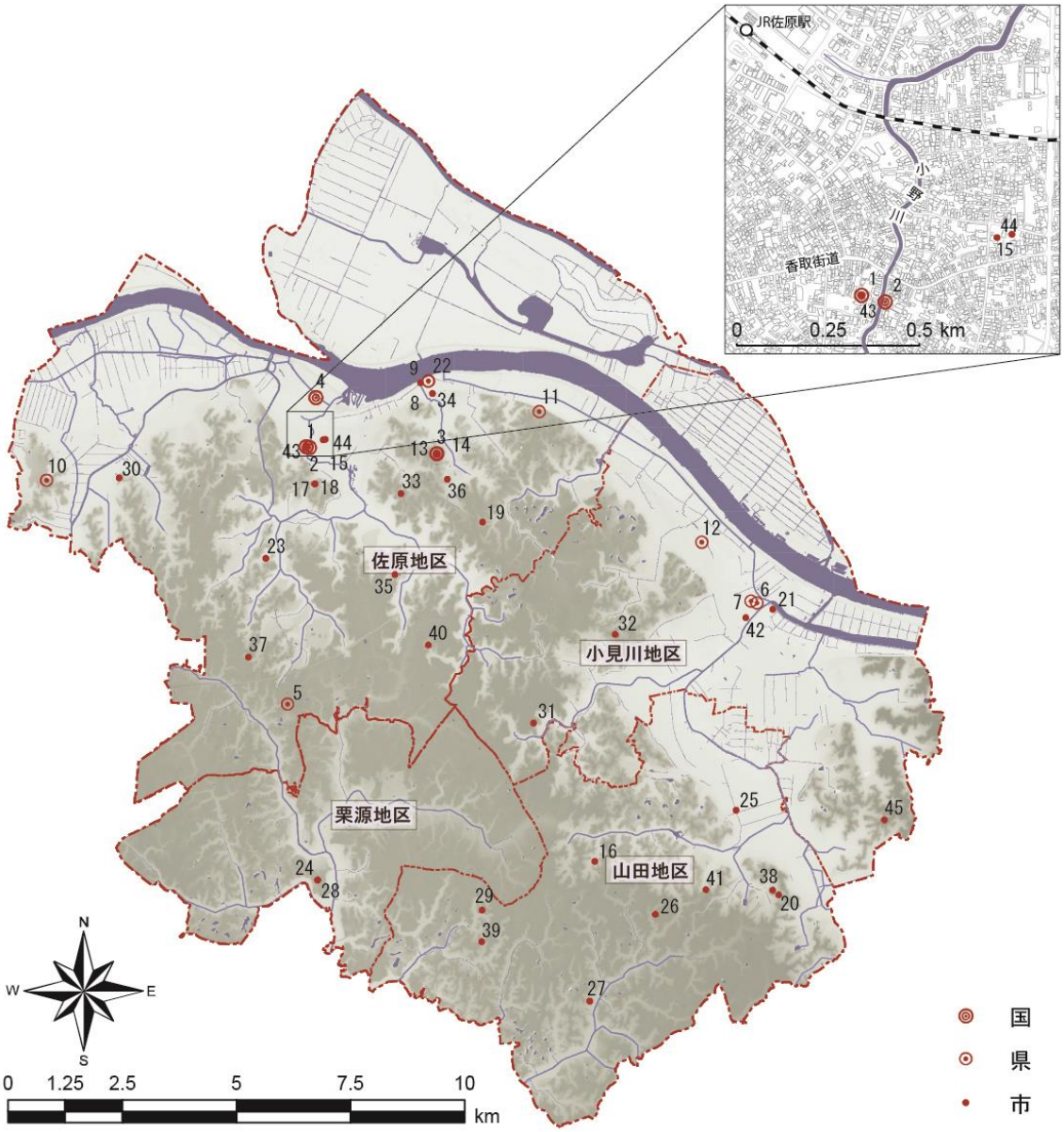
香取市南部の苅毛地区に所在する仏性山実相寺は日蓮宗の寺院である。創建年代は未詳だが、明応 3 年（1494）日久上人の代に真言宗から日蓮宗に改宗したと伝わっている。延宝 2 年（1674）には、同寺にも日賢により常葉壇林（市指定史跡）が開設された。一時は隆盛を極め、多数の学僧のための宿坊が並んでいたが、江戸中頃の火災により檀林の堂宇は焼失し、山門（市指定建造物）だけが今に残ったといわれている。

実相寺山門

○府馬の大クス

山田地区にある府馬の大クスは、樹齢 1300 年とも 1500 年とも伝わる古木で、府馬字山ノ堆に鎮座する宇賀神社の境内にある。古くから府馬の大クス、あるいは山ノ堆の大クスと呼ばれ、当地域随一の巨木として親しまれてきた。大正 15 年（1926）に大クスが国の天然記念物に指定された際はクスノキとして告示されたが、のちにタブノキであることが判明した。今ではこれも、大クスにまつわる逸話の一つとなっている。弘化 3 年（1846）に刊行された宮負定雄の『下総名勝図絵』でもその様子を窺い知ることができる。また、この絵には、大クスの大きな枝のひとつが地面に接してさらに伸びていることが示されている。現在、大クス本体から少し離れた所に子グスと呼ばれるタブノキがあり、この木が元は大クスの枝であったのではないかと言われている。

『下総名勝図絵』の大クス



No	指定	分類	名称
1	国・国宝	有形・歴史資料	伊能忠敬関係資料
2	国	記念物・遺跡	伊能忠敬旧宅
3	国	有形・建造物	香取神宮本殿
4	国	民俗・無形民俗	佐原の山車行事
5	国	記念物・遺跡	下総佐倉油田牧跡
6	県	記念物・遺跡	佐藤尚中誕生地
7	県	記念物・遺跡	初代松本幸四郎墓
8	県	記念物・遺跡	久保木竹窓遺跡
9	県	有形・歴史資料	久保木竹窓遺品
10	県	有形・建造物	西坂神社本殿
11	県	有形・建造物	側高神社本殿
12	県	民俗・有形民俗	浄福寺の鬼舞面
13	県	有形・建造物	香取神宮旧拝殿
14	県	有形・建造物	香取神宮勅使門
15	市	民俗・有形民俗	八坂神社旧神輿
16	市	記念物・遺跡	土井利勝植林指導地
17	市	記念物・遺跡	伊能忠敬墓
18	市	記念物・遺跡	楫取魚彦墓
19	市	民俗・無形民俗	多田の獅子舞
20	市	有形・建造物	安産大神
21	市	有形・古文書	脇家文書
22	市	有形・建造物	津宮河岸の常夜燈

23	市	民俗・無形民俗	大崎の大和神楽
24	市	有形・建造物	実相寺山門
25	市	記念物・遺跡	土井の新堤
26	市	有形・建造物	稲葉山神社本殿
27	市	民俗・無形民俗	白川流十二神楽
28	市	記念物・遺跡	常葉談林
29	市	有形・建造物	山倉大神本殿
30	市	記念物・遺跡	肥前鹿島藩鍋島氏の遺跡
31	市	民俗・無形民俗	油田神楽
32	市	民俗・無形民俗	木内神楽
33	市	民俗・無形民俗	新市場神楽
34	市	有形・歴史資料	千体仏
35	市	有形・建造物	返田神社本殿
36	市	有形・建造物	天真正伝香取神道流道場
37	市	民俗・無形民俗	本矢作区の神楽
38	市	民俗・無形民俗	愛宕神社神楽
39	市	民俗・無形民俗	山倉大神　白川流十二座神楽
40	市	民俗・無形民俗	下小野神楽
41	市	民俗・無形民俗	長岡　稲葉山神社　神楽
42	市	有形・歴史資料	小見川藩主内田氏関連位牌
43	市	有形・歴史資料	伊能忠敬関係資料
44	市	民俗・有形民俗	旧関戸町の猿田彦　頭部及び両手部
45	市	有形・建造物	来迎寺宝篋印塔

近世における香取市の文化財分布

（５）近・現代

明治 4 年（1871）政府は藩制を廃し、全国的に府県をおく廃藩置県の令を発した。それまで藩政に基づいて置かれていた多くの小県も整理され、本市地域は新治県（にいはりけん）となった。新治県は現在の茨城県南部と千葉県東部にあたり、水郷・霞ケ浦周辺・筑波山麓を範囲とした県で、県庁所在地は土浦（つちうら）にあった。その後、明治 8 年（1875）の統合により、新治県は廃され、ほぼ利根川を境に分割され、利根川以南の多くは千葉県に編入された。

近代化や西洋化が進み工業・商業はめざましい発展を遂げ、開拓や観光業が盛んとなったこの時代、香取市では、蒸気船や鉄道が運行し「水郷の舟遊び、銚子の磯遊び」と称され、多くの観光客が訪れた。

現代では江戸時代から伝わる佐原の町並みや香取神宮、佐原の大祭を中心に観光客が訪れる観光地となっている。農業も地形を生かして米・野菜・畜産とバランスのとれた生産を行っており、観光農園なども増えてきている。

○利根川下流域治水の要・横利根閘門

近代の土木遺産として横利根閘門（よこと ね こうもん）がある。市の北部を西から東へ流れる利根川は、江戸時代の大規模河川改修により、東へ流れを変え、現在のように銚子から海へ注ぐようになった。これにより佐原の発展や新田開発などのメリットもあったが、大雨による氾濫にも悩まされた。このため、近代になると政府による大規模な利根川改修工事が行われた。明治 33 年（1900）に始まった工事は、３期に分けて行われ、昭和 5 年（1930）に竣工した。洪水を防ぐための築堤（ちくてい）や川床の浚渫（しゅんせつ）、湾曲した箇所の直線化、水門などの設置が行われた。

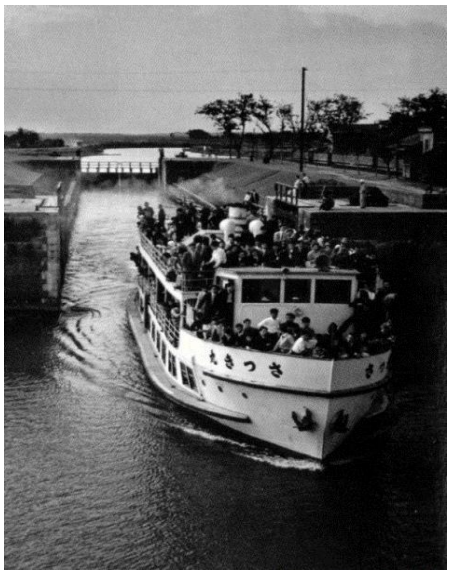
横利根閘門

この第２期工事で建設されたのが横利根閘門である。日本で最大級の規模を持つ煉瓦造閘門で、横利根川南端、利根川との合流点（茨城県稲敷市西代（にっしろ）地先）に位置している。霞ヶ浦氾濫の主要因であった利根川高水時の逆流を防止し、

かつ船の通航を可能とする目的で設けられたものである。大正 3 年（1914）8 月に起工、同 10 年 3 月に竣工した。船の通行数は減ったものの現在も使用されており、平成 12 年（2000）に国の重要文化財に指定された。

○水郷観光の隆盛

若山牧水（わかやまぼくすい）や北原白秋（きたはらはくしゅう）など当時の著名な作家による水郷地域を詠った紀行文が取り上げられると、この地域の観光人気が高まった。昭和 5 年(1930)から始まった水上プロペラ機を使用した観光飛行は、佐原から銚子まで 15 分で結び、当時としては高額な運賃（片道 10 円：現在換算で約 5 万円相当）であったにもかかわらず多くの観光客が集まった。また、昭和 6 年(1931)に就航した、当時国内最大の浅喫水船（さんきっすいせん）「さつき丸」は、全長 50m、155 トンの 3 階建ての白い船体で「水郷の女王」とも呼ばれた。土浦・潮来・鹿島を行き交い、多くの観光客を運んでいた。また、加藤洲（かとうず）の十二橋は、昭和 30 年（1955）に美空ひばり主演の「娘船頭さん」が映画化されたことにより観光客が激増した。



横利根閘門と観光船（昭和初期）

水郷はあやめの名所でもあり、現在は水郷佐原あやめパークが整備され、あやめ祭り・はす祭りに多くの観光客が集まる。

○利根川の水を上総へ・両総用水

下総と上総を結ぶ用水路である両総用水事業は昭和 16 年（1941）の戦時状況下で始まった。この大事業が実施されるようになったのは、砂地のために干ばつに悩む九十九里平野と、洪水に悩まされる利根川下流域という、ふたつの地域の対照的な水利問題を解決するという目的であった。全長約 80 ㎞にも及び、千葉県内の約 20%の水田がその恩恵を受けているといわれるほどの、全国でも最大級の用水路である。工事は中断や終戦後の混乱期、地盤による難工事を乗り越え、昭和 32 年（1957）に幹線となる佐原から東金（とうがね）までの通水試験がようや

く成功した。その後、全体が完成したのは昭和 48 年（1973）のことである。長い年月をかけて完成したものの、その間に水利事情は戦前とは大きく変わってきており、水田利用のためだけの用水ではなく、工業用水などにも使う多目的用水としての役割に変化した。

香取市内では、国道 51 号が通る水郷大橋付近の利根川両総水門で取水し、第一導水路、両総第 1 揚水機場を経て利根川支流の香西川を横切り、分水嶺を越えて栗山川へつないでいる（8p 図参照）。第一導水路の両岸は桜の名所となっており、春先には「さくらまつり」が開催される。

春の第一導水路

○栗源地区名産・ベニコマチ

日中戦争より太平洋戦争へと戦火が拡大するにつれて、農業の形態も変化してきた。養蚕を主体としていた栗源地域の農業も、食糧増産の掛け声により、桑畑は甘藷（かんしょ）栽培へと転化していった。その後、昭和 49 年（1974）に同地区の畑で試験栽培されたのが栗源地区でのベニコマチ栽培の始まりである。ベニコマチは甘味が強くおいしいと好評で、以後作付面積は増加したが、つる割病に弱く、長い形状で曲がりも多いなどの欠点から、後発の新品種ベニアズマに大勢が移っていった。しかし、焼きいもにすると特においしいベニコマチは、町おこしの起爆剤となって再び知名度が上がっている。

いも祭りの風景（1976 年当時）

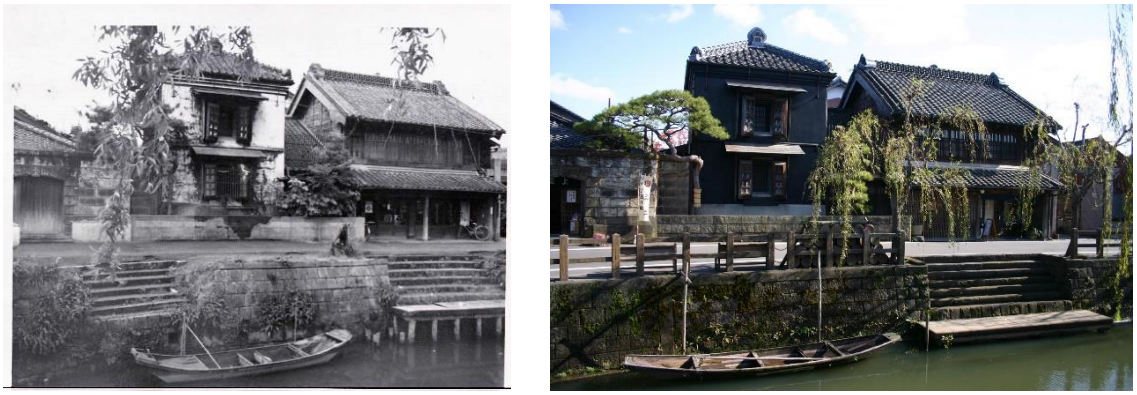
ふるさといも祭は昭和 51 年(1976)に第 1 回が開催された。以後毎年 11 月に行われ 40 回以上を数える。イベントのメインで行われる、籾殻（もみがら）でじっくりと焼く焼きいもの風景は平成 6 年(1994)に第 2 回美しい日本のむら景観コンテストで農林水産大臣賞を受賞している。

○佐原の町並み観光

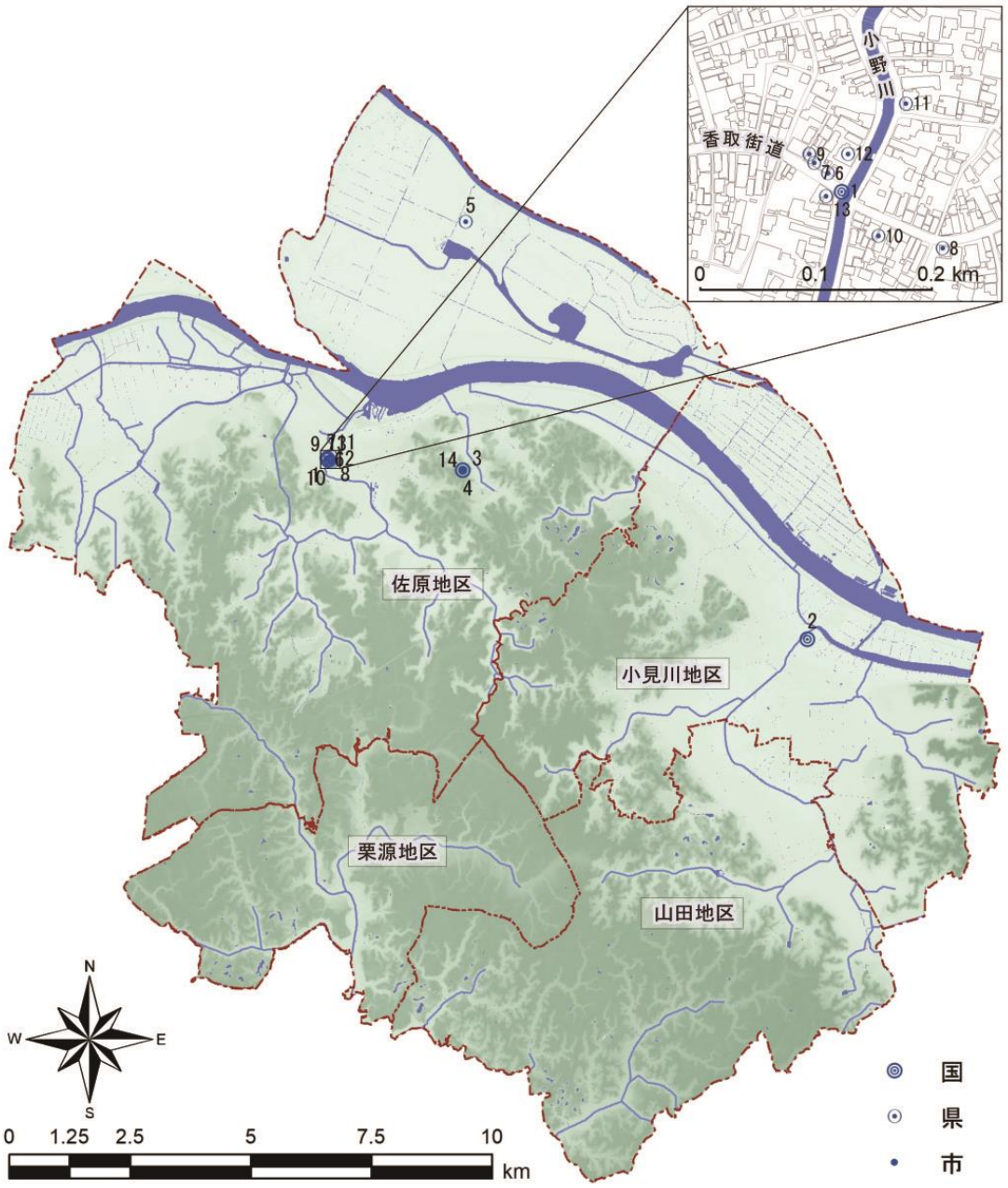
舟運で栄えた佐原は、鉄道輸送が発達してくる近代において流通拠点としての重要性が低下していった。隆盛した江戸後期から明治までの町並みは、新たな大規模開発などが行われなかったことで比較的良好な状態で残っていた。昭和後期からこの町並みを積極的に保存していこうという機運が生まれ、「小江戸佐原」の観光資源として活用している。平成 8 年（1996）には、関東地方で初めて国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、現在は、さらなる保存と活用が進められている。

平成 23 年（2011）の東日本大震災では、地震で建物が被災するだけでなく、市内の干拓地、水田地帯のほか市街地でも液状化が発生し、佐原の町並みを流れる小野川は噴出した土砂で埋まり、護岸は崩壊し、多数の電柱が傾いた。多大な支援や地元の努力により、現在ではその痕跡が感じられないほどに景観を取り戻し、一度は減った観光客数も震災前の水準にまで回復している（平成 28 年度実績）。

さらに平成 28 年（2016）には日本遺産「北総四都市江戸紀行」のストーリー構成都市として認定され、佐原の山車行事は「山・鉾・屋台行事」のひとつとしてユネスコ無形文化遺産に登録されるなど、今後の更なる振興が期待される。



改修を重ねながら今に伝わる町並み（左は昭和初期、右は平成 29 年）



No	指定	分類	名称
1	国・選定	伝建	香取市佐原伝統的建造物群保存地区
2	国・登録	有形・建造物	染織処　谷屋土蔵
3	国・登録	有形・建造物	香雲閣
4	国・登録	有形・建造物	香取神宮拝殿・幣殿・神饌所
5	県	民俗・無形民俗	おらんだ楽隊
6	県	有形・建造物	正文堂書店店舗
7	県	有形・建造物	小堀屋本店店舗
8	県	有形・建造物	三菱銀行佐原支店旧本館
9	県	有形・建造物	福新呉服店　店舗兼住宅・土蔵
10	県	有形・建造物	中村屋乾物店　店舗・文庫蔵
11	県	有形・建造物	正上醤油店　店舗・土蔵
12	県	有形・建造物	旧油惣商店　店舗・土蔵
13	県	有形・建造物	中村屋商店　店舗兼住宅・土蔵
14	市	有形・建造物	神庫

近・現代における香取市の文化財分布

（６）香取市と関わりのある人物

香取市に関係する人物では、初めて全国の測量地図を作製した伊能忠敬が知られている。ほかにも多くの知識人・文化人を輩出しているが、特に重要な功績を遺した人物を生誕年順に紹介する。

①飯篠長威斎家直

正長元年（1428）～長享２年（1488）

県指定史跡・飯篠長威斎墓

天真正伝香取神道流は、室町時代に形成され、その後の多くの流派に影響を与えたわが国最古の権威ある武術として知られている。流祖である飯篠長威斎家直は、香取郡多古町飯篠に豪士の子として生まれ、のちに丁子村（現香取市）に移り住んだ。ある日、香取の神の不思議な力を感じ取り、香取神宮境内の梅木山不断所に千日籠りの修業をし、ついに剣法の奥義を極めるに至った。これが天真正伝香取神道流の始まりとされている。その後、将軍の足利義政（1436-1490）に仕えたが、まもなく帰郷し、香取神宮近くの新福寺門前に道場を開き子弟を指導する日々を過ごした。長享２年（1488）４月 15 日に没した。

②府馬時持

？～永禄８年（1565）

市指定建造物
府馬左衛門尉時持宝篋印塔

府馬氏は千葉氏国分胤道（矢作領主）の血筋にあたる。室町末期、府馬城城主の府馬左衛門尉時持は北総制覇の野望を抱き、安房の里見氏と友好関係を結んだ。里見氏の将・正木時忠の軍勢と共に同族の米野井・小見川など数城を攻略するも、正木勢と二手に分かれた後に大須賀氏の反撃を受け、香取市上小堀付近で討死した。嫡男勝若は母方の伯父の神野角助を頼り、僧（良暁）となり名を上げた。良暁は香取市貝塚の来迎寺に父・時持と恩人で伯父の神野角助の宝篋印塔を建てており、これらは来迎寺宝篋印塔として市の指定文化財となっている。

③土井利勝

元亀 4 年（1573）～寛永 21 年（1644）

茨城県指定文化財・絹本著色土井利勝肖像画（正定寺蔵/古河歴史博物館提供）

徳川家康・秀忠・家光三代に仕え、老中・大老をつとめた人物。7 歳の時に徳川秀忠の傅役となる。慶長 9 年（1604）に秀忠が征夷大将軍に任ぜられた際に随行し、利勝も従五位下・大炊頭に叙位・任官した。慶長 10 年（1605）には早くも秀忠付の老中となり、一国一城令・武家諸法度の制定や改訂に携わった。三代将軍家光の元でも寛永 15 年（1638）まで老中をつとめ、長く幕府の中枢を担った。

香取市との関係は、慶長 7 年（1602）に 28 歳の若さで小見川藩主となり、慶長 7 年（1602）～慶長 15 年（1610）と元和元年（1615）～寛永 10 年（1633）の二期藩主であった。植林の指導、堤防・堰を築いた成果が現在に残っており、それぞれ市指定文化財となっている。

④内田正信

慶長 18 年（1613）～慶安 4 年（1651）

市指定歴史資料
内田家氏関連位牌

幕臣の内田正世の次男として生まれた正信は、寛永 7 年（1630）から三代将軍家光の奥小姓として仕えた。寛永 14 年（1637）に旧小見川村周辺等 8,200 石を加増され一万石の大名に列せられる。慶安 2 年（1649）には下野国に 5,000 石を加増され鹿沼に居所を定めた。家光が慶安 4 年（1651）に 47 歳の若さで病死した際、側近の大老・堀田正盛らと即日切腹し殉死した。正信 39 歳の時のことであった。このことは当時非常に話題になり、恩を受けながらも殉死しなかった者は非難された。

その後、明治維新を迎えるまで小見川藩が存続し、十三代・内田正学が小見川藩知事となることができたのは、正信が将軍家光の死に臨み、殉死し果てた功績によることが大きいと言われている。

⑤初代松本幸四郎

延宝 2 年（1674）～享保 15 年（1730）

県指定史跡・初代松本幸四郎墓

初代松本幸四郎は、香取市小見川の島田家に生まれ、元禄年間（1688-1704）の初め江戸に出て久松多四郎の門に入った。享保 13 年（1728）11 月に「弁慶」の当たり役で喝采を浴び、荒事・立役を最も得意とした。弁慶の上演回数は千数百回に及び、二代目市川団十郎と並び当代の名優と称せられた。

香取市小見川にある善光寺の墓石には幸四郎と先妻および近親者の 3 名の法名が刻まれている。この墓は、幸四郎の死後 20 年以上経ってから、近親者の没年である寛延 4 年（1751）以降に建立されたものである。初代松本幸四郎の墓は、東京都文京区の栄松院にもあり、こちらも妻の死後に建てられている。この善光寺の墓石の存在により、初代松本幸四郎が小見川の出身であることが確認された。

⑥楫取魚彦

享保 8 年（1723）～天明 2 年（1782）

市指定史跡・楫取魚彦墓

江戸中期の歌人・国学者。本姓は伊能、名は景良。通称は茂左衛門。享保 8 年（1723）に生まれ、13 歳にして名主役となる。成長するにつれ、当時の国学の興隆に参じ、早くより賀茂真淵の高弟となる。万葉集や記紀等の律文を好み、古語研究書の『古言梯』は学者必携の好著となった。明和 2 年（1765）に家督を譲って江戸浜町に住み、真淵のもとで研究に注力した。真淵の死後は門人の指導にあたり、魚彦に従い学ぶ者 200 余名で、その中には大名も多かった。かたわら、絵画や和歌をよくし、特に鯉や梅を得意としたことで「鯉の魚彦」とも呼ばれた。里謡に「利根川には過ぎたるものが二つある/鯉の魚彦に久保木蟠龍」と呼ばれるほどであった。天明 2 年（1782）に 60 歳で江戸にて没し、大正 15 年（1926）正五位を追贈された。

⑦伊能忠敬

延享 2 年（1745）～文政元年（1818）

肖像　伊能忠敬

山辺郡小関村（現九十九里町小関）に生まれ、宝暦 12 年（1762）に佐原の伊能家の養嗣子となる。酒の醸造と販路の拡大に努め、不振だった家業を持ち直すに至る。名主後見も務め、功績により苗字帯刀を許された。50 歳の時家督を子景敬に譲り、江戸の幕府天文方・高橋至時のもとで天文や暦学の研究に勤しんだ。私費で蝦夷地の測量を幕府に願い出、実測図と子午線一度の距離を算出した。この功績を認められ、幕府に全国測量を命じられる。東日本、西日本、江戸府内の詳細な地図を作製した。

地図のほかにも日記や測量機器類や所蔵書籍などが一括で伊能忠敬関係資料として平成 22 年（2010）に国宝に指定され、市内には国指定史跡の伊能忠敬旧宅や伊能忠敬記念館が整備されている。遺骸は東京都台東区の源空寺にある師の高橋至時の墓と並べて葬られ、毛爪は香取市牧野の観福寺に納められている。現在、源空寺の墓所は国指定の史跡、観福寺の墓所は市指定の史跡である。

⑧久保木清淵（竹窓）

宝暦 12 年（1762）～文政 12 年（1829）

県指定史跡・久保木竹窓遺跡

久保木清淵は、下総国津宮村（現香取市津宮）の名主久保木清英の二男として宝暦 12 年（1762）に生まれた。号は蟠龍のほか、竹窓、竹陰など竹にちなんだものが多く用いられている。儒教の教えや国学、暦学、天文学などに精通し、特に民衆教育に熱心で、私塾「息耕堂」を開き、子弟は数百人に達した。

また、清淵は伊能忠敬との親交も深く、「大日本沿海輿地全図」の完成にも協力し、特に地図に書き入れられた小さな文字は清淵の手によるものといわれている。国宝の伊能忠敬関係資料に含まれる「肖像　伊能忠敬」に添えた讃（絵に添える文章）も同様に清淵の手によるものである。

⑨佐藤尚中（さとうたかなか）

文政 10 年（1827）～明治 15 年（1882）

肖像　佐藤尚中

佐藤尚中（山口 舜海）は、文政 10 年（1827）に下総国小見川で小見川藩の医師・山口甫僊の次男として生まれ、江戸に出て西洋医学を学んだ。師の佐藤泰然が、佐倉藩主堀田正睦に招かれたのに従って佐倉に移り、「順天堂」の外科医として多くの患者を救い、また、多くの塾生に蘭学の指導をした。嘉永 6 年（1853）、泰然の養子となって佐藤姓に改め、万延元年（1860）頃には、「尚中」という名前を使うようになる。同年、長崎に一年半ほど遊学し、オランダ軍医ポンペに師事した。ポンペは尚中の手腕を高く評価する手記を残しており、既に相当な技術を身につけていたとみられる。明治 2 年（1869）に、尚中は政府に招かれて大学東校（現在の東京大学医学部）の中心となり、その基礎を築いた。その後、東京に私立の順天堂医院を開き、それが発展して今の順天堂大学となった。

⑩伊藤泰歳（いとうやすとし）

天保 11 年（1840）～大正 8 年（1919）

肖像　伊藤泰歳

香取神宮神官。15 歳の時香取神宮分飯司家（神官の家系）伊藤末則の養嗣子となり、翌年家督を継ぐ。安政 4 年（1857）、分飯司職に補せられる。

香取神宮で長らく廃絶されていた神幸祭の再興をはかり、明治 8 年（1875）4 月 14 日に挙行し、今日まで続いている。明治 23 年（1890）には香雲閣（現・国の登録有形文化財）を建て、「香取古文書」（うち一部が現・国指定の有形文化財）を編纂刊行し、明治 43 年（1910）に天皇皇后両陛下に献上した。香取神宮関係のみならず、和歌や地理などの著書も多い。

４．文化財等の分布状況

香取市には令和４年（2022）３月 11 日現在で、指定文化財などが 190 件所在する。その内訳は国指定文化財が 14 件（うち国宝 2 件)、国選定の重要伝統的建造物群保存地区が 1 件、県指定文化財が 46 件、市指定文化財が 126 件、国の登録有形文化財が 3 件となっている。国指定等文化財の件数は県内では市川市に次いで二番目、県指定文化財の件数は一番目、市指定文化財の件数は四番目と、千葉県内でも質・量ともに文化財に恵まれた市である。

分布の傾向としては、香取神宮周辺、香取市佐原伝統的建造物群保存地区周辺に集中する傾向があるが、概ね市内全域に広く分布する。各地区にそれぞれ特色を持っており、それが結果的に文化財の件数の増加につながっている。ここでは香取市として代表的なものや特徴的なものを取り上げる。

種類		国		県指定	市指定	合計
		指定・選定	登録			
有形文化財	建造物	1	3	13	16	33
	絵画				10	10
	彫刻	1		5	9	15
	工芸品	4		7	4	15
	書跡・典籍				2	2
	古文書	1		2	9	12
	考古資料			7	13	20
	歴史資料	1		1	11	13
無形文化財				1		1
民俗文化財	有形の民俗文化財			2	4	6
	無形の民俗文化財	1		2	14	17
記念物	遺跡	4		5	29	38
	名勝地				1	1
	動物、植物、地質鉱物	1		1	4	6
伝統的建造物群		1				1
計		15	3	46	126	190

香取市内の文化財一覧

（１）国宝

・伊能忠敬関係資料（歴史資料）

伊能忠敬（1745-1818）は、佐原の伊能家に婿に入り家業を栄えさせ、名主として佐原の繁栄にも尽くした。50歳で隠居後に江戸へ出て、天文学・測量術等を学び、寛政 12 年（1800）から文化 13 年（1816）までの 10 次にわたり日本全国の測量を行った。

沿海地図中図　東海道・北陸道・東山道沿海図

指定されている資料は、地図・絵図類 787 点、文書・記録類 569 点、書状類 398 点、典籍類 528 点、器具類 63 点で、総数は 2,345 点にのぼる。地図・絵図類には成果品の沿海地図中図などがあり、器具類は象限儀、量呈車、観星鏡、御用旗などの測量器具がある。

・海獣葡萄鏡（工芸品）

香取神宮が所蔵している中国の唐時代に盛行した海獣葡萄鏡の優品で、8 世紀頃にもたらされた伝来品。正倉院御物と同寸同形の鏡で、白銅質、直径 29.5 ㎝、重量 537.5g、中央に海獣（獅子）の鈕、周辺に葡萄唐草の地紋をあしらい、獣・鳥・昆虫などを配している（写真は 21p 参照）。

（２）国指定・選定文化財

・香取神宮本殿・楼門（建造物）

香取神宮本殿

ともに元禄 13 年（1700）に江戸幕府の直轄事業として造営された。右写真の本殿は三間社流造に後庇を加えた両流造で、三間社流造としては最大級の規模をもつ。檜皮葺、黒漆塗りで蟇股や虹梁・組物等に極彩色の装飾を施す。平成 25 年（2013）に屋根葺替工事を行っている。組物や蟇股等は古風なところがあり、前代の慶長期の様式が伝わるとみられる。

・古瀬戸黄釉狛犬（工芸品）

香取神宮が所蔵する陶器製の狛犬一対で、阿形は高さ 17.6cm、吽形は 17.9cm。鎌倉後期から室町時代初期。瀬戸古窯で焼かれたもので、類品は、愛知県深川神社、東京根津美術館など全国でも数例が見られるのみである。もとは摂社の又見神社に安置されていたもので、阿形は昭和 51 年（1976）発行の 250 円通常切手の図案に使用された。

古瀬戸黄釉狛犬（左が吽形、右が阿形）

・伊能忠敬 旧 宅（遺跡）

伊能家は、旧佐原村本宿組の名主を務め、酒造業や米穀売買などを家業としていた。旧宅は、市街の中心部を南北に流れる小野川沿いにある。敷地内には、小野川に面した店舗と正門、店舗の奥に続く炊事場と書院、さらに書院の東側に建つ土蔵がある。伊能忠敬は婿養子として伊能家の家業を隆盛させ、50 歳で隠居して江戸に住むようになった。

伊能忠敬旧宅　店舗

・良文貝塚（遺跡）

香取市東部の貝塚地区の台地上に位置する大型の貝塚。縄文時代中期から晩期中葉まで、時期のかたよりがありながらも幅広い年代の遺物が出土している。記録では明治時代より発掘が行われており、昭和 5 年（1930）には県内初の国指定の貝塚となった。貝層の見学施設があるほか、地元の団体「貝塚史蹟保存会」により維持管理され、良文貝塚出土の県指定文化財・香炉形顔面付土器の保存活用も行っている。

良文貝塚　標柱

・佐原の山車行事（無形の民俗文化財）

佐原の山車行事は、本宿と新宿のそれぞれの鎮守社祭礼の「つけ祭り」が大きく発展したものである。本宿は7月の八坂神社の祇園祭、新宿は10月の諏訪神社の諏訪祭として、年に二回行われる。

各町内の大人形を載せた山車が、日本三大囃子とも称される佐原囃子の音色のもと、歴史的な町並みの中を曳き廻される。平成28年（2016）には「山・鉾・屋台行事」のひとつとしてユネスコ無形文化遺産に登録された。

新宿・諏訪祭の風景

・香取市佐原伝統的建造物群保存地区（重要伝統的建造物群保存地区）

香取市の佐原市街地を蛇行しながら流れる小野川沿いと、これに交差する香取街道沿いなどの地域は、平成8年（1996）に国の伝統的建造物群の選定を受けた。この地区は、町屋や土蔵、洋風建築等の伝統的建造物が、小野川などの環境と一体となり、近世以降の河港商業都市として繁栄した歴史的な景観を現在に伝えている。

江戸時代初期に利根川の東遷が行われ、小野川と利根川が連絡するようになると、佐原は利根川下流域の物資集散地として重要な位置を占めるようになった。また、銚子街道、香取街道、成田街道、八日市場街道、多古街道などの起点や通過点であり、陸上交通の要衝でもあった。

小野川沿いの町並み

（３）千葉県指定文化財

・三菱銀行佐原支店旧本館（建造物）

香取市佐原伝統的建造物群保存地区内に所在し、異彩を放つ洋風レンガ造の建造物。大正３年（1914）に清水満之助本店（現在の清水建設）技術部の設計で川崎銀行佐原支店として建設され、三菱銀行との合併を経て、平成元年（1989）に香取市に寄贈された。なお、明治時代には川崎銀行本店設立と同時に佐原出張所が設けられており、かつての佐原の繁栄を物語っている。

三菱銀行佐原支店旧本館　外観

現在、地元では「三菱館」と呼ばれ、ランドマークとしても親しまれている。

・西坂神社本殿（建造物）

香取市西部の西坂地区に鎮座し、かつては西坂大明神、西坂大神宮と呼ばれ崇敬されてきた西坂神社の本殿。棟札によると元禄９年（1696）の再建、三間社流造で、屋根は現在銅版葺。地方神社建築としては本格的な様式手法を用い、千葉県の 17 世紀後半の神社建築を代表する建物である。

西坂神社本殿

・羅龍王面・納曽利面（彫刻）

香取市中西部の大戸地区に所在する大戸神社に伝わる面。舞楽に用いられた面で、堅木材の漆塗り。右写真の羅龍王面は縦 30.3 ㎝、横 19 ㎝、嘉暦３年（1328）銘で、頭上に翼をもった龍をのせている。納曽利面は２面あり、縦 19 ㎝、横 17 ㎝、鎌倉末期の様式。これらは雨乞いの儀式に用いられたとされる。

羅龍王面（大戸神社蔵）

・梵鐘（貞和五年在銘）（工芸品）

香取市北西部の大戸川地区の浄土寺にある 97.6 ㎝、径 57.5 ㎝の梵鐘。三種類の銘文があり、現存の梵鐘より前の建長 6 年(1254)に鋳造した梵鐘の銘文の写し、貞和 5 年（1349）に宝福寺（所在地不明）という寺院に納めたこと、慶長 7 年（1602）に奥州岩城（現在の福島県）より現在の浄土寺に移した経緯などが記されている。

梵鐘（貞和五年在銘）

・関峯崎３号横穴出土金銅製押出仏（考古資料）

香取市西部の関峯崎横穴群（香取市及び成田市）のうち３号横穴から出土したもので、７世紀後半の製作と考えられる。特徴としては、中尊と脇侍の様態やバランスからすると、元来は別の型で打ち出したものを、後にひとつの光背に鋲留めしたとみられ、別個のものであった可能性が高い。用途としては、木製台座などに光背下部を差し込んで、念持仏としていたと思われ、それを被葬者の副葬品として納めたものとみられる。

関峯崎３号横穴出土金銅製押出仏

・浄福寺の鬼舞面（有形の民俗文化財）

香取市北部の下小堀に所在する浄福寺は、良忠上人（1199～1287）の開山と伝えられ、『鬼来迎問答跚供養』（正和 5 年〈1316〉3 月）によると、建長 2 年（1250）に開山として迎えられた良忠上人が内容を考案したという。正徳 2 年(1712)2 月に上演した台本である『鬼来迎問答引接跚供養由来記』、上演時に用いた 33 個の仮面、若干の衣裳が保存されている。

浄福寺の鬼舞面

（4）香取市指定文化財

・安産大神（建造物）

安産大神　向拝彫刻

安産大神は市内東部の府馬地区に所在する。元は愛宕山正法院地蔵寺の仏堂として建立され、明治4年（1871）に木花開耶姫を祭神とし安産大神と改称した。本殿は、桁行・梁間とも二間半、入母屋造。正面唐破風付。屋根は平成6年（1994）に銅板葺に改修した。破風下の鳳凰・梁間の双龍・四隅柱上の獅子頭等の彫刻は精巧緻密で、小社殿ながら重厚な風格を示している。これらの彫刻は古内村（現香取市古内）の鈴木多門豊賢作とされる。

・千体仏（歴史資料）

千体仏（千仏寺蔵）

江戸時代の僧・木喰徳本宗休は、一生のうちに一万体の仏像を刻して全国に奉納した。宗休は香取市新部に住み、このうち千体を惣持院に納め、住職東精法印は香取市津宮の毘沙門の地に千仏寺を建て仏像を安置したと言われている（現存は863体）。

・千葉親胤御影（歴史資料）

千葉親胤御影（久保神社蔵）

千葉親胤御影は香取市東部の久保地区に所在する久保神社に伝わり、その別当寺だった光明山最勝院（別名親胤寺・現在は廃寺）で保持していたもの。作者は千葉定胤で、江戸時代の製作とされる。親胤は7歳で千葉宗家の家督を継いだが17歳で暗殺された。その後、千葉家において祟りが相次いだ記録（『千葉實録』作者、年代不詳）があり、親胤の怨霊を鎮めるために定胤が最勝院を建立し、御影を寄進したと推察される。

・肥前鹿島藩鍋島氏の遺跡（遺跡）

市内西部上小川地区に所在する円通寺は、肥前鍋島藩の支藩の一つ・鹿島藩の初代鍋島忠茂の菩提寺で、忠茂のほか、４代までの墓石がある。忠茂は故あって 2 代将軍・徳川秀忠に仕え、家康から下総国本矢作領４万石のうち５千石を下賜され、この地を領し円通寺を菩提寺として寺を再興した。鍋島氏は元和８年（1622）～元禄 12 年（1699）まで本矢作領５千石を領した。

肥前鹿島藩鍋島氏の遺跡（円通寺境内）

・清宮秀堅墓（遺跡）

文化６年（1809）に佐原で生まれた漢学者で、地理・歴史・儒学にも長じ、棠陰などの号がある。幼少時には久保木清淵ら文化人に学んだ。佐原村の領主津田氏に仕え、同家の財政管理を 20 余年務め、その間名主をつとめることもあり、苗字帯刀を許された。『下総国旧事考』は 30 年をかけて書き上げたほか、香取・海上・匝瑳の『三郡小誌』をまとめるなど著書多数。佐原の浄国寺に墓所が所在する。

清宮秀堅墓（浄国寺境内）

・樹林寺四季桜（植物）

市内東部の五郷内地区に所在する樹林寺の伝承によれば、南北朝の応安年間（1368～1375）に開山覚源禅師の手植えである。エドヒガンとマメザクラの交雑種と考えられており、毎年４月と 10 月から１月まで二度開花する（右写真は 11 月撮影）。明治４年（1871）の大火で多くの建物と共に焼けたが、残った株から枝が成長して今も毎年花を咲かせている。

樹林寺四季桜（樹林寺境内）

（５）主な未指定文化財

・木内廃寺跡　香取市内初の仏教施設

木内廃寺跡出土の軒丸瓦

木内廃寺跡は、香取市中央部の木内地区に所在する、当地方で最も早い時期に建てられた寺院跡である。建物の基壇跡とともに多くの瓦が出土し、本遺跡の西方約１㎞にある清水入瓦窯跡で焼かれたものと判明している。出土した瓦の特徴などから、木内廃寺跡の造営時期は７世紀第４四半期頃と推定され、全国的に寺院が造営された時期と一致する。この地域の歴代首長の墳墓とされる城山古墳群と近いことから、かつての国造などの有力氏族が関与した可能性が高い。

・清水入瓦窯跡　木内廃寺に瓦を供給

清水入瓦窯跡は、香取市中央部の虫幡地区に所在する、７世紀後半の瓦窯跡である。ここで作られた瓦は、本遺跡の東方約１㎞にある木内廃寺に供給されたと考えられる。木内廃寺の造営のために、瓦の製法や窯の構築方法などの専門知識や技術を持つ工人集団がこの地にいたことを示す遺跡である。

（６）日本遺産「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」

○日本遺産と「北総四都市江戸紀行」

日本遺産（Japan Heritage）とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定するものである。平成 28 年（2016）、江戸を支えた北総四都市の歴史の物語が、「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」として日本遺産に認定された。

○北総四都市のストーリー

城下町の佐倉、門前町の成田、商業と河岸の佐原、

港町の銚子と、北総四都市の町並みはそれぞれタイプが異なる。江戸を感じる町並みとして、日本遺産ではこれを一つのストーリーに結びつけ、認定を契機に四都市による新たな物語が生み出されることに期待するものである。

○お江戸見たけりゃ佐原へござれ　佐原本町江戸優り

これは江戸を引合いに佐原の賑わいをあらわした俗謡で、赤松宗旦（あかまつそうたん）が安政年間に著した『利根川図志（とねがわずし）』にも「下利根附第一繁昌の地」「水陸往来の群集昼夜止むことなし」と評されるなど、江戸時代の佐原の繁栄がうかがえる。小野川筋と香取街道沿いの商家や醸造蔵などの町並みはこの頃にはすでに形成されていた。この繁栄を支えたのが「利根川東遷」により整備された水運である。佐原は下利根随一の河岸として発展し、東北地方や江戸と強く結びつき、多くの物資や人が行き交うようになった。

○三社詣で賑わう香取神宮

下総国一の宮として古代から鎮座する香取神宮は、江戸後期になると舟運で木下河岸（印西市）を経由した香取神宮・鹿島神宮・息栖（いきす）神社の三社詣（さんじゃもうで）が人気となり、信仰だけでなく行楽地として多くの旅人が訪れるようになる。その中には、松尾芭蕉（まつおばしょう）、小林一茶（こばやしいっさ）、渡邉崋山（わたなべかざん）などの文人墨客も含まれていた。

○地域文化の発展

利根川水運の隆盛は、この地域の経済力を高めただけでなく、江戸との文化的な交流も深め、それに刺激を受けて、地域文化も醸成された。その結果、多くの文化人も輩出した。代表的なところでは、初めて精密な日本地図を完成させた伊能忠敬、和学者の楫取魚彦、儒学者で忠敬と親交の深かった久保木清淵（せいえん）（竹窓（ちくそう））、そして小見川には順天堂医院（のちの順天堂大学）を創始した佐藤尚中や江戸歌舞伎の初代松本幸四郎などがいる。